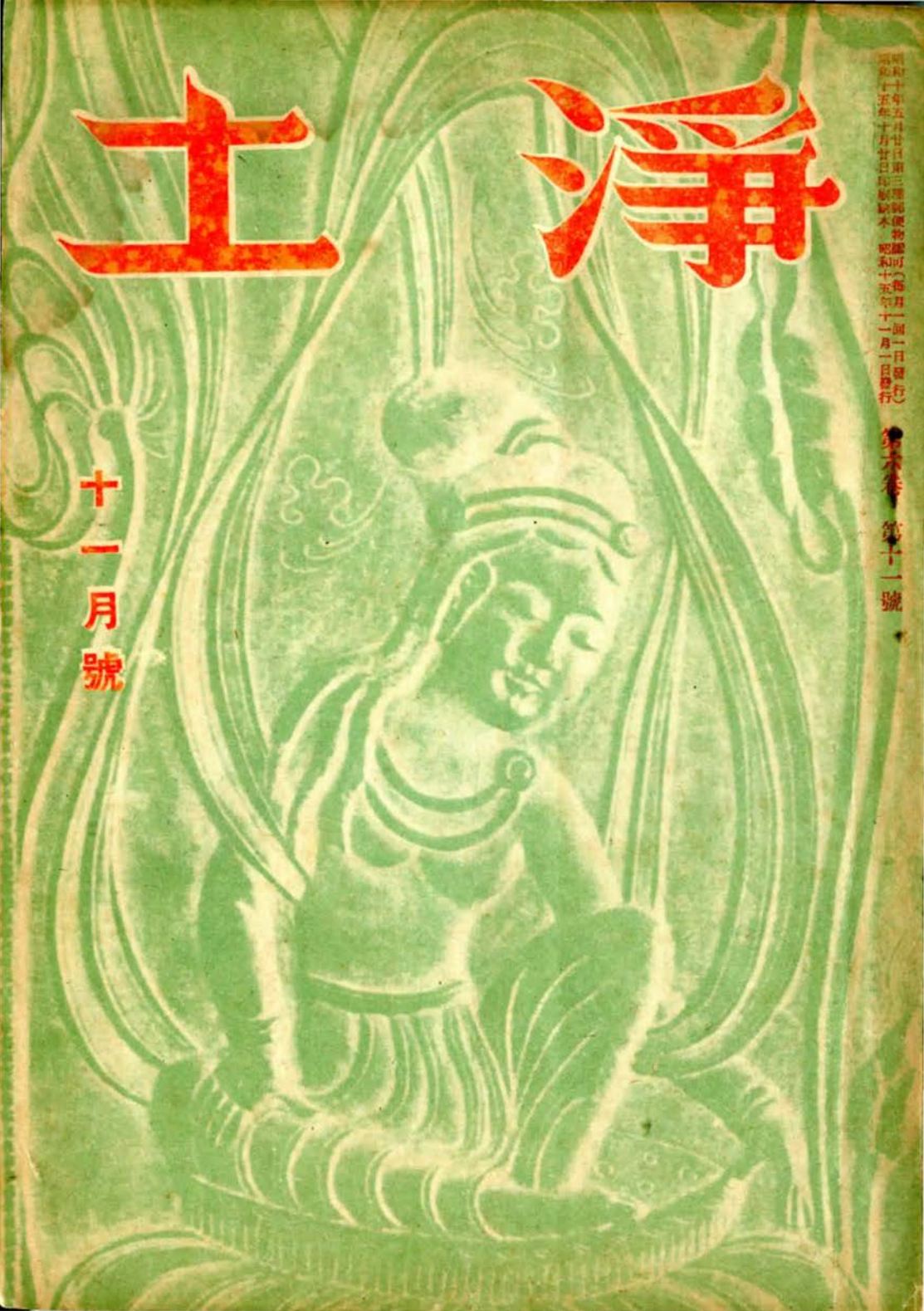


土淨

十一月號

昭和十五年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十五年十一月一日發行

第 十 一 號



陸海軍 慰問浄土 病

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に二ケ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に六千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十萬冊以上の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

新發賣

一旦二球で健康量



肝油を精製した
純ビタミンAD

肝油が効くのはビタミンAとDの爲だと判つてゐる今日、魚油のまゝの肝油で我慢する必要はありません。本品は肝油から精製抽出したビタミンAとDを無味無臭のドロビュール球に収めた快適な製品——肝油の効果は完全に数十倍に強化され且快適化されました。

合理的な新製品

新製管理研ビタミン球は、最近のビタミン學說に據り、一旦二球づゝ服めば完全な生理的價値を補はせる様に、一球ビタミンAと千D一千國際單位を含有させた製品。しかも両球ほどの小球です。

一月量 六〇球 二圓

品切の節は總代理店へ

總代理店
株式會社
玉置商店
銀座東京七二番

品製研理

理研
ビタミン
二球

淨土十一月號 目次

表紙

橘夫人念持佛光背ノ一部

扉・目次カット

米倉隆從

女性
講座

六波羅蜜の話……………日野西德寶(六)

阿彌陀さま

佐藤春夫

(一〇)

報恩米のことども……………増谷文雄(四)

靜寛院宮さまを想ふ……………渡邊得男(四)

亡父の
思ひ出

百

萬

遍……………村田嘉久子(二〇)

再び本尊の坐像に就て……………中村辨康(五)

隨感隨想……………栗山源道(三)

歌壇……………奥謝野晶子選(九)

俳壇……………太田耳動子選(三)

佛敎大乗の國……………(三六)

映畫大乗の國……………(五一)

讀者だより……………(五一)

漫畫……………山崎善一(五一)





信

仰

相

談

中村 辨康 (四)

信仰
坐談

念 佛 する 心……………淨き友會 (四)

菩・提 樹 の 話……………原田 萬吉 (三)

童話 雁と蛙とみづ……………宮澤 雅夫 (二)

寺院 巡り 知恩寺に詣て……………城 山 生 (一)

鵲 鳴……………吉田 絃二郎 (六)

上法然
人 和 歌 註 解……………安西 覺承 (四)

心經
講義 覺醒の彼岸に往け……………中村 辨康 (六)

編輯 後記……………(五)

淨土十一月號 目次

会館上入館取

廣 告

揮毫の取次を

致します

御利用下さい

法然上人御仰會で

取次をする揮毫部を

開設いたしました。

揮毫部は皆さんの御

希望で何でもお求め

に應じますが、例へ

ば會社商店等の一寸

した招牌（小包郵便

で送れる程度のも

の）標札門標の類、

墓碑（これは寸法と

原稿さへお送り下さ

れば宜しい）碑文（こ

れも同様）印刷用ボ

皇東漸慧成弘覺慈教明照

スターの文字等を揮毫いたしました。

別項取扱概要を御一覽の上精

々お申込下さい。

揮毫は當分

小橋麟瑞氏

が擔當致します。同氏は此方面に多年の經驗を有せられ、その書風は一家獨特の境地を開いて居られますから充分御期待に副ひ得ることを確信いたします。書體は篆書、隸書、楷書、行書、草書の五體ともお希望に應じます。適宜お任せ下されば猶結構です。

取扱概要

- 一 種目 材料 揮毫料
- 一 墓碑銘、紙面五圓以上
- 一 碑文、同、參拾圓以上

- 一 門標、木材、漆圓（用材無料提供但し材質御註文の方は用材をお送り下さる）
- 一 招牌、同、拾圓（長さ三尺二寸迄）
- 一 其他石版摺捺摺狀（コロン紙）印刷用ボスター類の文字

- ◇右の内墓碑揮毫は大體碑面二尺二寸程度を標準とします。
- ◇墓碑の側面に連刻する開歷文は一宇五錢の割合でいたします。

碑文は大體墓碑開歷文の倍額として計算します。

◇門標は氏名と住所を別々に御希望の向は二枚分とし、一枚に氏名又は氏名住所併記は一枚分として取扱ひます。（前金お申込に限る）

◇招牌は小包郵便で取扱う大きさを限度とし材料を御送附の分に限りお取扱ひいたします。料金を前以て決定し難いものは代金引換郵便を利用します。

◇本會會員に限り特に二割引。御拂込は本誌挿入の振替用紙を御利用下さい。

◇詳細は法然上人御仰會館取扱次條り宛照會のこと。

（凸版は小橋麟瑞氏筆跡）

會員各位へ御利用を願ひます

淨土

十一月號

たとへばおもき石^{いし}を舟^{ふね}にのせつれば、
しづむことなく、萬里^{ばんり}のうみを渡るが
如し、罪業^{ざいごふ}のおもき事は石のごとくな
れども、本願^{ほんがん}のふねにのりぬれば生死^{しじ}
のうみにしづむ事なく、かならず往生^{おうじ}
する也。

法然上人御法語



女	性
講	壇

六
波
羅
蜜
の
話

微笑の中に國民の原動力となりませう

日 野 西 德 實 尼

悟りの暮しへの道

我が國の年中行事の中春秋二度の彼岸は氣候の變り目に當るので、肉體的・精神的に大きい變化が起る時であります。自然、人の日常生活、衣食住の上にも影響があるもので、内から外から様々な國民的感情が盛り上る行事となっております。中にも宗教的情懷が豊かにたよふて、誰れでも自然に修養的な氣分になるものであります。此時分にこの「六波羅蜜の話」を致す事は誠に意義深いものを齎える次第であります。

さて、六波羅蜜の波羅蜜は梵語即ち印度の言葉であります、彼岸と云はれてゐるもので、詳しくは到彼岸と申します。其譯は、人が理想の彼岸に到達せんとするには、即ち、其障礙をかへる爲には、此の到彼岸の行を實行せねばならぬといふ意味

で、それが六つあるから六波羅蜜と申すのであります。普通これを六度とも云ひ、佛教では、迷ひの暮らしから、悟りの暮らしへ救はれて行く六つの眞實の行と申して居ります。眞の人として生活するには、必ず此の六波羅蜜の修養をするこ
とになつてゐるのであります。

布施とは相扶けること

さて、六波羅蜜の第一は施、施しといふことで、財施、法施、無畏施と數へあげますが物質的・精神的の施しをする事を云ふのであります。此等が圓滿に行はれますれば、世の中が平安であるといふ意味であります。譬は貧しい方々に財を施すにしても、名譽や利益を考へて、不純な心で施したり、また何も分らぬ人に知恵を施して、よく解らせてあげるにしても、相手





馬鹿にしたり、輕蔑したり、傲慢な心から法を施す等は、未だ眞の施しではありません。或は又信用のある人が保證に立つのも、信用を施して、人の災難を救つたりして、人生を安樂に導くことになるのでありますが、これとて無暗に恩を着せたりするのでは、眞の道ではありません。

其處で物質的にも精神的にも、互ひに施し合ひ助け合ひ助け合ふことによつて、共に理想に到達せんとするには、己むに己まれぬ心から我を忘れて親切にするのでなければ、本當の施しにはならないのであります。亦一歩ずつ考へて見ますと、どんな善い布施行が出来までも私一人で出来るものではありません。大體、私がこうしてゐる事の出来るのは、親の御蔭、先祖の御蔭、お國の御蔭、天地の恵みによるのであります。此等の御恩の中に生かされてゐると思へば、すべて知恩報恩と言ふ美しい心持から、溢れ出るので此處に、私を滅して公に奉ずる眞の布施行が完成されるのであります。此世で不幸な人と云ふのは、貧乏や病弱以上に、恩知らずの人であると云ふべきであります。人から親切にされようとするには、先づ自分が、人に心から親切を盡すことであります。つまり人間の一番のよろこびは、善物のあることや、器量のよいことではなく、本當に親切をして人様に喜んで戴くことであります。これが感恩生活の現はれであらうと信じます。かゝる同胞抱け合ふ心持が、

いつの世の中でも國運盛衰の根本の力であつたのであります。

戒とは己れの慎しみ

第二には戒、戒めといふことでこの身に、この心に戒めを必要とし、慎まなければなりません。既に慎しみ深いことが大切であると申すのであります。國を擧げて立派に和合せしむるには、國民の一人々々が、此の戒め、しつけ、慎しみがなければなりません。これは神や佛を信する正しき信念から、心とからだの上に、常に正しき行ひとして、現はれるもので、普通には五戒十善と申して居ります。殺すなどいふても生きものに對して云ふだけでなく、何物も何事も生かすことで、今日云ふ資源愛護も此にあたるのであります。

盗むなどいふても、人様のものを盗まないと云ふ位の事でなく、公のもの、天地のものを私せず、一生懸命、働くことが大切であります。男女間には、邪淫不義を慎しむのは、當り前のことで、これを無駄せね生活、無駄なき人生と申すのであります。又人の口はうるさいものでありますから、妄語するな、嘘つくな冗談いふな惡口いふな二枚舌を使ふなと戒め、眞に眞面目な生活をすゝめるものであります。酔っぱらつたやうな足どりで人様に御迷惑をかけたなり、御厄介になつたり互ひに邪魔し合ふといふ様な事もなく、目ざめ氣づいて一心に職場々々を



守り、一人一役を本職なきを恥とするのが、信仰生活の入口で、その本職をまつしぐらにやらせて頂きます事が、信仰生活の本當の姿であると教へられたものであります。それが人間としての本當の戒めのある人、饒み深い人であるといふ教誨でありまして、眞に明るい、正しい、和やかな世の中の現はるゝ所以で、お互ひのよい修養の道であらうと信じてゐるものであります。此様に一人々々が自己を戒めることによつて國民道徳が完成されて行くのであります。

忍耐で身心を飾りませう

第三に忍、耐え忍び、辛抱することです。佛教では「婆娑は忍土」と申しまして、此世は何事も忍ぶべき所であると云ふのであります。即ち普通云ふ所の忍耐より更に進んだ身身の行動の根柢としての、忍を強調するのであります。諺にもある様に「成る城忍は誰もする、成らぬ城忍するがまことの城忍」であります。忍の徳は一切のものを造りあげる力であることは申す迄もありません。然し乍ら、外國人の中には、日本人は性急で短氣で怒り易く、復讐心が強い點を指摘してゐるものが少くありません。又外國人ばかりでなく、日本人の間にもさういふ批評がありまして、一般に日本人には忍耐力が乏しいやうに言はれたり、見られたりする事は誠に残念なことで、二千

六百年の歴史を本當に細くならば、祖先の忍耐の徳が日本の國運であり、今後の國運も國民の忍耐が造り出すべきものと申すべきであります。この際婦人の目覚めによつて、衣食住の節約を始め、あらゆる苦しみに耐え忍び、悲しみに打ち勝ち、國運の別離にも打ち勝つて國民一人として忍の徳をやるならば、論より證據、昭和維新翼賛の眞の姿となるものと信じます。かくして我が國は、其の理想の彼岸へ到達するのであります。實に佛の教へられた忍耐力、忍辱行こそ、人生の最上の尊い寶であつて、整潔品や寶玉類の代りに、忍耐力の寶で、身心を飾りまして、國恩に報ひ、皇運扶翼の道に進進したいものと思ふのであります。

女の力て精進の徳を

第四に進、此れは努力精進することです。本當は勇猛精進と申しますから、體勉努力と徳を磨くことであると申してもよいと思ひます。玄那の百丈禪師と云ふ方は一日爲さざれば、一日食はずと教へられた程で、ぶら／＼して爲す事もなく、無駄に過ぎずといふ事は、人として申すのなない事で、倦まず、究まず、努力する姿は神佛の姿も、このやうであらうかと、手を合せて拜みたい心地が致します。體勉努力の尊さを味はぬ間は、本當の人生の價値さへ分りません。婦人の目ざめによつて、子に



際、家の内外に、どうか生れ申ある、努力精進の徳を植えて戴きたいと思ふのであります。

毎日の生活に大切な禪定

第五に定靜しくは禪定と申しますが、心に落着きのある華であります。不動の信念といつたり、安心立命といつたり、致しますが、全く落着きの徹底したことで、身と心に、安定のある姿となつて、現はれるものであります。現代の如き世界動亂の時代には、人々が焦燥・不安に襲はれて、切符制度一つにしても、マツチ・砂糖・大はお米か・炭か・手拭か・其大は何が出て來るかと、臺所を中心の主婦達が、昭和の井戸端會談に忙がしく、落着いて仕事も手につかぬといふ有様であります。親切も、忍耐も、努力もどこへやら、只、前途に取越し苦勞をしてゐるたへ騒ぐばかりでは、何にもなりません。

佛は先づ靜かに、時よ時節を認識せよ、心を落着け、信念を定めよ、如何なる事も時が解決する、とお教へになつてあります。即ち、何時も動かぬ心持ちで、我を忘れて、所謂、無私奉公をするのであります。丁度坐禪した時の様に、動かぬ心持ちを以て、今なす仕事に傍目もふらず、一心に、喜びはたらしき形みはたらくうちに、自ら光あり、力あるもので、これを定にいつた姿として、佛教では信仰生活の標準の姿と申して居る

のであります。

理論倒れをやめませう

第六に最後の智慧であります。普通の智慧には、愚る智慧が多く、智慧ある人の失敗、墮罪は誠に多く、現代のなやみの一つであります。お經の中にも、或時一匹の蛇の尾が、頭のないのもきかず、先頭に立つて歩き出した所、目がないものですから、火のある穴の中へ落ちて、焼け死んだといふことがあります。又有名な群盲象を摸くと云ふ様な話が出てゐまして、机上の空論や、理論倒れを戒めてあります。今、佛の教へられる智慧は、眞實の智慧、體驗の智慧のことでありまして、杖當に分つたのは、今なす仕事の上に、工夫し、研究して、生活の進歩、向上をはかり行くもので、かゝる發明研究やまざる智慧を指してゐるのであります。

以上のべ來りました様に、如何なる困難にも耐え忍び、憤み深い、親切な人として、微笑の中にお互ひが接し合ひ、助け合ふ間に自ら、六波羅蜜の實行者となることが出來まして、世のため、人のためになり得るであります。

婦人は實に國民の半數を占め、時局重大と婦人協力の必要を叫ばれてゐる時にあたりまして個人としても家庭の一員として、亦國組の一員としても、盛り上る力の重擔であります。



立派な國の三つの條件

(四)

そもそも國が立派な申し分のない國であるためには凡そ三つの條件がそろひ具はつてゐないことには完全とは云はれないのです。その三つの條件とは何か。國土と統治者と人民たちです。國王が豊かでその上に手ぬかりなく經營されてゐなければなりません。安樂國——すなはち極樂淨土では金銀など豊富なところに、最大最高で不滅不壞の智慧を持つた阿彌陀さまがその智と徳とを傾け

阿彌陀さま

觀音・勢至がお助けして

困ることのないお國

佐藤 春夫

盡して國土經營に苦心をしてだいたいどんな風なものが出来てゐるかといふ事はごくあらましながら前々號で話して置いたとおりであります。

わが國でも近來國土經營といふことを重要な國策の一つとして考へはじめた模様ですが、人類の世界の文化を代表しようといふ大きな抱負を持つ限り、これは當然な企てで、稍おそかつたといふ憾はあつても、何にせよ非常に結構なことで、どんな風な設計が立てられるか、その發表が楽しみに待たれるものであります。それはさておいて、阿彌陀さまの國では早くから國是に従つてその國土が十分に經營されてゐたのであります。

觀音と勢至は大臣の役目

それでその極樂淨土の統治者はいひますと、これは

南無阿彌陀佛御自身と

其御相談相手と申すか、

その實際止の仕事をな

さる大臣のやうなお方

がおふたり。おふたり

とも阿彌陀さまの大へ

んたくさんのお子さま

がたのうちでも父上の

お氣に召した方であら

れる。觀世音菩薩と勢

至菩薩とであります。

觀世音菩薩はまた觀

自在菩薩ともいひわが

國では一般に觀音さまと呼ばれてゐる佛さまです。此佛

さまは大慈悲の誓ひを立てられた佛さまで、極樂では阿

彌陀さまの左のお脇に侍つて居られるのです。何ごとで



もすべてをよく御存じのお方で人間のすべての事をすつかりお見とほしの上で人間に愛憎をつかさないで、人間を氣の毒な可哀さうなと思し召して居られるお方です。もうおひとりの勢至菩薩といふお方は、極樂では阿彌陀さまの右のお脇に侍つて

居られますが、このお方はこの上なし智慧のすぐれたお方でそれ故お頭の上には智慧のしるしに寶の瓶をいただいたお姿で像がつくられて居ります。

勢至は威力

一たい阿彌陀さまはこの上なしのお慈悲と智慧との二つをおそなへになつたお方ですが、おふたりのお子さんのうちの觀音さまが父上のお慈悲の方を受けつがれたのなら勢至さまの方へはお智慧の方を傳へなされたものと見えます。勢至さまは

人間に就て何もかもお見透になつて御存じないといふことのない點では觀音さまと變りはありませんが、このお方は觀音さまのやうに慈悲一方のお方ではなく大へん強いお力をも持つて居られるのでこの上なしといふ智慧でお考へになつても御理解の出来ないやうな嘘やごまかしなどはすぐ見破つた上で一旦お腹立ちになると大したお力を持つて居られるのです。さうしていつもお行儀のいいその足を一度お投げ出しにでもなると、そのことだけで、三千世界——といふのは小さな世界が三千集つて一つの大きな世界になつてゐるといふのが佛教の方の世界の考へ方で、言はば全世界といふことと同じわけです。

——その全世界とそれに魔の宮殿とが同時に震動するといふ程の威力を備へて居られるので勢至菩薩と言はれるのです。どこまでも堪忍し我慢をして理解出来るかぎりはどうしても許せない意地なればならないものに對してだけは最後の手段としてこの力を揮ふことも出来るといふお方です。極樂淨土の成立や發展を邪魔立てする者が萬一あつた場合にはこの方が出てお働らきにならなければならぬわけでありませう。申してみればまあ極樂淨土安樂國の軍部ともいふ

のでせうか。それにしても、ほんの足を投げ出しただけで全世界が震動するといふのですから、この方が一度思ひ存分にあればたら一たいどうなるといふのでせうか。まあ想像してごらんないまし魔の宮殿などは木葉みじん、三千世界などは卵の殻でせうではありませんか。けれどもまあめつたにそんな事はありませんまい。と申しますのは、その御相談相手には何事でも大きな慈悲でおゆるしにならうといふ觀音さまがおいでになるのですから。よく恩威並び行はれるといふことを申しますが、極樂に觀音さまと勢至さまとが居られる限りは、どんな場合に遭遇しても決して困るやうなことはございませう。それ故、阿彌陀さまはいつも安心して觀音さまと勢至さまとに一切をおまかせになつて置かれます。

勢至さまはいつも考へ込んで人間の行ひや考へをちつと見て理解しようとして居られます。この方は智性に訴へて人間をお宥しになるのです。觀音さまは溫いお情けをもつて人間を宥し、人間の苦しみを心配して居られます。さうして苦しさに堪え兼ねて、阿彌陀さまのお情にお頼りしようと呼びかける人間の聲を先づ第一にお聞きつけになるのはこの觀音さまであります。

阿彌陀さまのお名前



ところで阿彌陀さまのお名前でありましたが、これは本當は南無阿彌陀佛さまと申されるので、阿彌陀さま御自身ははじめ、南無お頼みます」といふ言葉をお名

前の上にくつつける事をお望みになつてさうお名前を御自分でつけられたのです。と申しますのは、此佛さまは大へん御深切な佛さまですからいつも人間から何かを頼まれたがつて居らつしやるのです。人間がとかく苦勞だらけの生き物だからいつも他人の助けがほしいに違ひない。さうして自分を呼びかけるやうな時にはきつと何か頼み事があるに違ひないから、一そ御自分のお名に南無といふ字をつけて置かれたが早いとお考へになつたのでした。さうして此お名前をお呼び申しさへすれば、観音さまがそれをお聞きとりになると一緒にどこで誰がどういふわけで呼んだかといふわけまでもうすつかりお判りになるのです。さうして、それが極樂淨土に生れ出たいといふ希望を持つてゐる者だと判り次第、阿彌陀さま御自身が、時にはおひとりでなく觀音さまや勢至さまをはじめもつとたくさんのお供をおつれになつてわざわざお迎へに出られるのでございます。これが極樂淨土を統治する方々やその統治の仕方などのあらましであります。さて次にはこの結構な國の人民がどんな風に生れ、どんな文化をもつて、どんな風に生活してゐるのでせうか。(次號につづく)

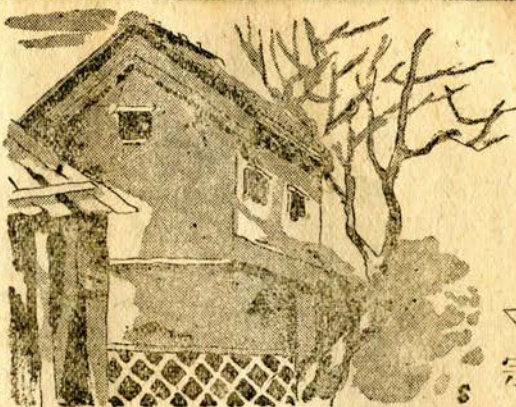
(鈴不今平畫)

▽ 宗 教 地 方 色 ・ 三 △

報恩米のことどもほうおんまい

(秋田と北海道の巻)

増 谷 文 雄



から北海道を歩いて参りました。その旅でひろつた宗教的なものの二三を記しておきたいと思ひます。

秋田では、雄勝郡の横手町と、秋田市とで、米を語る座談會を司會しました。秋田は、名にし負ふ美人の國、酒の國そして米の國ですが、あの北邊の國で、おいしい米を多量に作るには、並々ならぬ苦心苦勞が拂はれてゐたのです。

雪の消えるのが遅いので、肥料はまだ田の上にとつさり積つて

ゐるうちに、雪そりで運ばれて、雪の上にひろげられるさうです。

雪の消えるのを待ちかねる人々は、雪の上に土をまくのださうです。黒い土は白い雪よりも、よく太陽の熱を吸収して、雪だけを早めることが出来るのです。

そんな苦心をして植えた稲作も、田本中で一ばん日照時間の少いと言はれるこの土地では、いつも冷害凶作におびやかされてをります。

数年前の冷害の時にも、この土地の人々はひどい目に合はされました。あの時には、日本中の人々が力を認せて、東北の人々に救助の手をさしのべたのですが、この土地の人々は、よくあの

際の際を心に銘して、事あるごとに報恩の行を心掛けてゐることを聞かされて、本當に嬉しいことと思ひました。

報恩米といふのがその一つです。

その始まりは、多分、先程の大阪の風水害の時だったと聞きました。災害の報知があると、すぐ、御恩がへしに米を送らうとの議が成立して、各村各戸に、報恩のための寄附米が割當てられたのですが、忽ち、豫定をはるかに突破した報恩米が、かづ／＼の美談をのせて、災害地へと送り出されました。

東北の人々の心根は、いつまでも純粋で美しいのです。

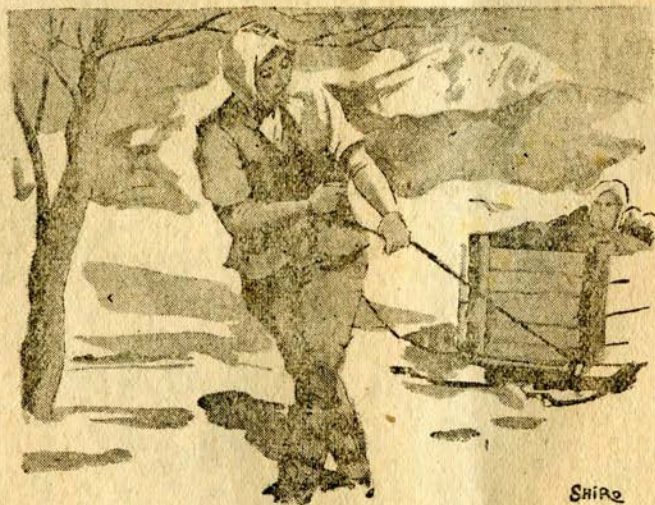
二

その美しい心根は、いま私どもの上にも延べられてゐるのです。

いま、田中村の人々は、米に困つて

をります。殊に私ども都會に住んでゐるものは憐れなものです。

それを、政府當局では、この上の不自由をかけまいと、米産地に



SHIRO

指令して、供米に大童の勞力をしてをられる。それでも既に、大きな感謝に値するのですが、この秋田に来て、いろ／＼と供米に

からむ美談を聞かされて、いよく私には、心をうたれずにはゐられなかつたのです。

ある山の中の村では、これまで、米を村外に出したことがなかつたのを、いろ／＼供米運動の精神を聞かされて、それではといふので、始めて米をこの村から出すことになつたのです。ところが、米を他縣に出すには、米穀検査といふ制度があつて、中味は勿論のこと、外の偽の作り方にも、一應の規格があるのですが、まだ米を村外に出したことの無い村の人々は、検査偽の作り方がわからず、驟から来た役人に教はりながら、やつと規格に合つたものを作る事が出来たといふことでした。ほ／＼えましい美談です。

また、ある村では郷倉を開いて、供米に應じたといふ例もあります。

郷倉といふのは、御承知の方も多いでせうが、先年の凶作以来、どの村にも作られてある不時の備への米倉です。またあんな凶作に遇ふこともあらう。その時はじめてその郷倉を睨いて凄がうといふのです。だから、減多なことでの倉は開くべきではないのです。

だが、今度ばかりは、自分たちは凶作に遇はなかつたが、日本國中のお米が不足してゐるのだ。自分たちが困つたときに

助けて貰つたことを思へば、今度は、自分たちだけ困らなければ、それでよいといふ譯には行かない。今までの恩に報いるのは、こんな時を置いて外にはない。そこでこの土地の人々は、供米のためには、郷倉を睨いてもと決心をしたのであります。世の中に、報恩の行ひほど人の心を美しく尊くするものはあり



SHIR2

ません。そこには宗教的なものがみちあふれてゐます。

三

東京から秋田に行つて、本當にこの土地のお米のおいしいことを、しみんと感じたことでしたが、以前は「秋田のくされ米」などと言つて、こんな甘味しい米はとれなかつたのだやうです。

それを、米の國秋田に上上げるまでには、多くの人の研究、努力がつまえたのですが、殊に、石厩理紀之助翁をはじめとして、多くの老農の存在は、この土地の人々の誇りでした。

石厩理紀之助翁のことは、高等小學校の教科書にも出てゐて、既に大分ひろく知られてゐます。明治の初めから大正初年まで、鋭意農道のために力をつくした生涯は、まことに尊いものであつた。明治の二宮尊徳などと言はれて、ありますが、ある點ではむしろ二宮尊徳翁以上の存在ではな

いかとさへ思はれます。

私は、幸ひ、この石厩翁の跡を訪れて、樺の石厩太郎氏から直接、つぶさに石厩翁の事蹟を聞く機會をもつことが出来ましたが、流石にあれほどの生涯をもつた石厩翁には宗教的にも數々のすぐれた點のあつたことを知ることが出来ました。

その中でも、秘は、石川翁の贈謂「五計」なるものを、ここに紹介して置きたいと思ひます。

これは元來、唐の朱統仲といふ人の説いたものださうですが、秘間の一生を五部に分けて、次のやうに配列してをります。

- 一、生計 生後二十歳まで
- 二、身計 二十一歳より三十歳迄
- 三、家計 三十一歳より四十歳迄
- 四、老計 四十一歳より六十歳迄
- 五、死計 六十一歳以上

石川翁はこの五計を採つて「五計」は

人生の一大事を決するに最も必要なり。秘は常に後悔なからんことを心がけ、安心した死に臨むべき支度なかるべからず」と説いてゐるところはこの翁、決してたゞの老農ではないと知られませう。

幸ひ石川翁は、七十一歳の高齡まで生を保つことを得たので、所謂「死計」を完ふする時間を充分に持つことが出来たやうです。いま石川翁の遺蹟を訪ねて見ると、その屋敷跡の一隅には、石川家代々の墓が一字の中にずらりと列べられてあります。



石川翁の墓は、向つて右から二番目にあつて、高さ三尺をこそこの自然石の表を磨いた「石川理紀之暇之墓」と記されてをります。その墓を指さしながら、案内の者が説明してくれました。

表裏の文字は、翁がその死の計の一つとして、生前に書きのこして置いたもの。墓石の自然石も、翁が自ら定めたもので、その餘り大ならざるは、先祖を凌がないやうにとの用意だとのこととす。石川家代々の墓は、もと各所に散在してゐたのを、こゝの一字の中に集めたのも、この翁の

仕事でした。「祖先の御墓を大切にすべし」とは、翁の記した「訓言」

の一條ですが、翁はその家族にも祖先の墓を日拜させてゐました。だが、祖先の墓が散在してゐたのでは、次第に敬意の心がおこらんとも限らない。そこで、祖先の墓をこの地に集めて、日拜を怠ることなからしめんとしたのも翁の死計の一つであつたと思はれます。すぐれた人の事蹟をしらべてみると必ず宗教的にもす

くれた點があるのですが、この翁にもまた、こうした一面のあつたことを、私は尊く銘記してをきたいと思ひました。

四

北海道では仕事ををへてから温泉につかる事が出来ました。

温泉は、今日では俗厭なものと化してゐるところが多いが、その起源は佛教とかなり密接な關係をもつてをります。

溯つて考證すると、支那に歸り、印度に溯らねばなりませんが、温泉を開いてこれを民衆の湯治の用に供することを教へたのは、大抵みな佛教僧侶でありました。

我が國でも、その例に漏れません。例へば東京に近いところでは言つてみると、熱海の温泉がやはりさうであつて、天平勝寶年間のこと、羅根の金剛王院の萬卷上人が、いまだ海中に溺れてゐた泉眼を探して、これを山腹に轉湧せしめたのが、そもく熱海温泉の起源でありました。

修善寺温泉の起源もやはりさうでした。

修善寺町の中央に名刹修善寺がありますが、この寺の縁起によると大同二年、弘法大師の弟子泉崎といふものが大師を扶けてこの寺を建立した。その時大師は桂川の河中に靈泉の湧くのを發見し、この土地のものに入浴治病の法を教へたのが、いまの獨鈷の湯のおこりであると傳へられてをります。

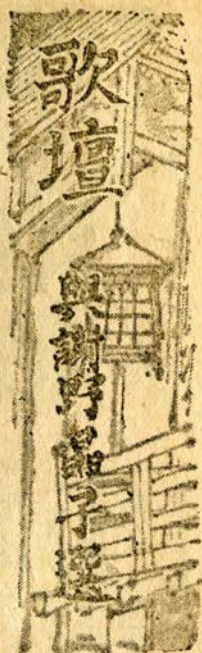
昔の僧侶は、人々に佛法を説くかはら、道を拓き、福をかけるなど、今日でいふ社會事業の先頭にたつて、民衆の利益増進のために努力したものでした。温泉を發見し、湯治の法を教へることも、さうした事業の一つとして、僧侶の手によつて行はれたことが多かつたのでした。

だが、それらは昔の事で、今日ではまるで夢のやうな話だと思つてゐたところが、私ははからずも、この北海道の温泉で、必ずしも然らざる事實に出會つて何とも言へない悦ばしい思ひをしたことでした。

それは、札幌から程遠からぬ、有名な定山溪温泉がさうなのです。定山溪の定山といふのは、思ひもかけぬ佛教僧侶の名からとられたものでした。

定山は、越前の人で、禪宗の僧侶でありましたが、慶應二年のころ、巡禮の途次、この地に到つて、温泉をひらき、遂に今日の盛んなる定山溪温泉の基を開いたとのことです。

詳しい話は知ることが出来ませんでした。が、慶應二年といへば明治の一年前です。こんなに私どもに近い時代にも、萬卷上人や弘法大師のやうな僧侶がゐられたといふことは、佛教のために本當に嬉しいことだと思ひました。筆者は、大日本青年團編輯課長。



北支那道軍 渡邊 岩 太

途遙く攻めて来しかなはてもなき
地平の彼方黒雲の湧く

評

征野千里、思へば故國を出でて遠く來たるものである戦ひに燃ゆる北支那の大手原は遠くひろがつて、そのはてに雨雲であらうか、黒い雲が湧いてゐるが、自分らの居るところまでは歸らしさうもない。それ程支那はひろいと、若い兵士の燃えがしみじみと溢れてゐる作である。

京都市 望月 久次郎

尾根や尾根へ思ひのままに涉り行
けば鳥も渡りぬ秋のみそらに

評

閑い情緒的な朗らかな歌である。晴れた秋の空のものを従僕に山歩きする若人の姿は鳥よりも軽いであらう。

東京 細田 初枝

榮ある御代を讀ふる歌聲に老いた
る父は涙したまふ

評

お父さんは恐らく明治、大正昭和の三代の世を見て来た方にちがひない。永く生きてきたものの程この國土を愛する心が深く、その國運のあとと共にくづべて、悲しと思ふものである。素直な國民的感情の一である。

京都 永田 七郎
清涼山禪堂の中われ一人外に閑
ゆる松風の音

北海道 野村 ノエ

身にしみて涼しき朝となりけり
夜著にひそみて病母もの云はず

北支那道軍 原 吉男

高梁の畑を赤く血に染めて斃れし
馬のたてがみを切る

新潟縣 今井 正徳

この年の獲り入れ高は分らねど待
ちて嫁しき秋となるかな

徳島縣 丸岡 長壽

靜かなる想ひの中に君と云ふ慕し
き人を浮べては見ぬ

徳島縣 海部 山人

閑にゐて雨のしづくを聴きあがりつ
よき朝となる樂しかりけり

千葉県 安田 保治

吾れの往く時こそ來れ火と燐ゆる
樞紅葉に心よせたり

鳥取縣 菅原 獨去
しかと見し流星なれど往く人のし
りへにあればわれ云はざりき

國府海軍病院 宇都 隆徳

現し身の病の床に臥せるとも心は
逝きたたかひの庭

城 西 梓 朝子

朝露の花に宿れる白露をこぼさぬ
程に秋の風吹く

朝 露 盤江 八年坊

美しき月を眺めて父母と樂しむ庭
は涼風に満つ

福岡縣 三浦 壽子

久々に鶯の聲きゝしてふ歸還兵
のこゑは若やにけり

東京 土田 かつ

後甲ふ人なき墓に若むして墓のか
なめは色つきにけり

東京 三野 輪幸節

雨晴れて富士の根蒼くそびえたり
冷え冷えとして秋清き朝

奈良縣 寺田 修平

來迎の佛は部屋の一いつ方にあらは
れますや思慕に堪へざり

金澤市 有側 芳子

東京市 小山 隆
病院の夜の静けさ音もなし柿の葉
越しに月渡るるなり

北海道 花田 國佳

ねざめにも御名を囁へてひたすら
に佛の誓ひたのみまゐらす

仙臺 秋月 浩子

朝露をもちて咲き居る花百合を剪
りつる上に法師の啼く

東京都 丸尾 徳山

天地の神の怒りか荒れ狂ふ空を眺
めて嘆く村人

茨城縣 伊藤 是る

もみを乾す陽の光に切られた
る紫蘇の香りのただよひにけり

愛知縣 志賀 謙江

新鮮な野果実物このまゝを父母は
らからに渡れぬものか

堺市 笠井 松枝

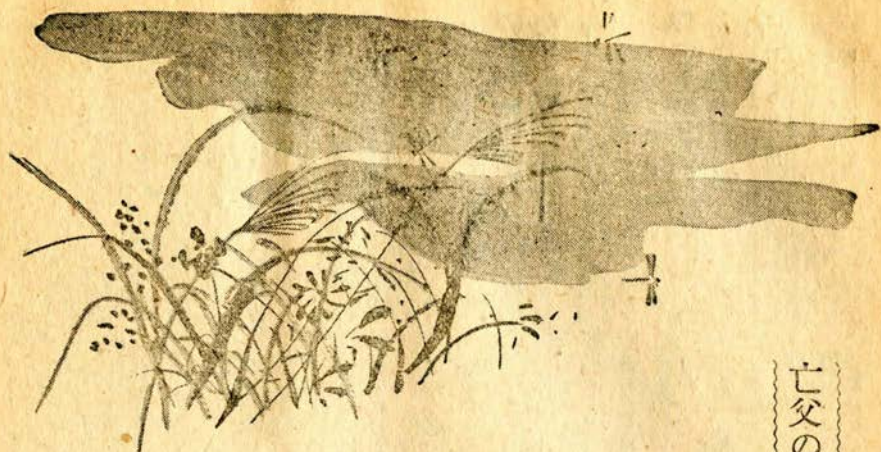
敵のこもる山の姿をさまたげに思
ひやりつゝ地圖折りたゝむ

栃木縣 島法 云海

葉を摘みて花出し見ん朝露の物に
かくれて二つ咲くなり

はがきに一回二首以内とし「淨土」編輯部が選任をてに送ること。

投稿規定



亡父の思ひ出

百 萬 遍

村田 嘉久子

秋の夜長になると、非常な信心家であつた私の父は、よく百萬遍を誦しました。子供の頃まだ其の時分、電燈のなかつた暗い座敷に、今から思へば嘘のやうな、それで居て其當時はかなり明るく感じたランプや行燈の光の下で、出入りの人達や店の番頭、若い小僧達と一しよに家族の者が皆寄合つて大きなお珠数を各々手にして聞座して、音頭取の父の聲に合せて「南無阿彌陀佛」を大きな聲で唱和するのでした。

自分の口から申しますのは可笑しいのですが、父の聲は非常に通るよい聲でした。一つには素人義太夫でできたへ上げたからかも知れませんが、一と際張り上げてお念佛を唱へる時など、其處に集る出入の人々が感嘆するは

ど美しい聲だつたので、其頃酒間屋を営つて居りました隣保からかなり近い土蔵造りの家で、でしたが、それでも外へ其聲がもれて「又松本屋さんで百萬遍を始めた」と、近所の人や道行く人々にもすぐ知られてしまふのでした。

そうした人が大したお知合でもないのに入つて居らしつて、我々と一しよに百萬遍を唱へると言ふやうな光景が毎度の事でした。

私はその百萬遍が樂しみの一つで、と申しましたが、小さい子供の時分として仲間はずれにさせられるのです。大きなお珠数が手に餘つて、手から放れて行つてしまふのでいつもくうまく行かないのです。

このお珠数には親玉とも言つて大きな珠がお珠数の長さや大きさによつて異ひますが四

ツか六ツあるのです。この大きな親王がお念
佛の終りの時丁度自分の手に止まると、非常
に良い事があるとか言つて皆喜ぶのですが、
そんな事よりも父が其終りの時に親王を擡つ
た者に特別に御ほうびを出して呉れることが
あるので、皆一生懸命です。我れこそ親王を
つかもうと、百萬遍の終りに近づくと他へ親
玉の逃げないやうに一生懸命つかんで放さな
いそんな人も出来て来て、私など子供心に矢
張親玉の廻つて来るのを待ちきれず親王を大
勢の圓坐の中へ入つて追ひ馳け廻して居たも
のでした。

亡父は心から百萬遍が好きでした、初め大
きくゆるやかに唱へて、時が経つにつれて追
々早間になつて行くのですが、鐘を打つのと
「なあむあみだんぶつ」と誦子を合せて唱
へ、だん／＼早くなつて「なんまいだぶつ々
々」と添して行くやうに唱へる處に、非常に
宜い誦子があつたと今でも思つてゐます。そ
してお念佛など言ふと皆店の若い者など嫌
がりますのを、親王をつかめば特別の褒美が

頂けるーと言ふやうな事から、誦つて一人
でも多く加へさせた處に、亡父は信心家とし
てえらい處があつたやうに思ひます。

あんまり珠數を廻して居るので掌が摩擦
されて感じがなくなつてしまふやうな事があ
りました。

今思ふと懐しい思出です。

念佛嫌ひであつた亡兄など、百萬遍が今晚
始まると聞くと慌てゝ何か用事をかこつて
外出してしまつては、よく父を苦笑させたも
のですが、其兄が亡る時矢張り一番心が落着
くと言つて、始終お念佛を唱へて、靜かに死
んで行つた事などを思ひ合せますと、矢張父
の子であつたとし／＼感じさせられます。

私は子供の時分よく「尼さん々々」と家の
人達に言はれて居ました。それは祖父が三州
の生れで、あちらでは女の子が三人あれば中
の一人は尼様にする風習があつたとか言ふの
で、丁度女の子の何番目のかは、三州にゐ
れば尼さんになつてゐたと言ふ譯で、そう呼
ばれてゐたのです。

隨感隨想

栗山源道

松籬が氣と渡つた。

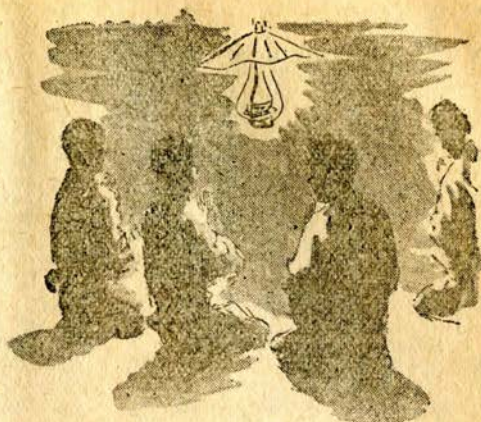
私は疲れ果て、煙の中で錫の柄を臺にし
て、一ヶ所を凝視する無想三昧の自分を發見
した。初夏の陽は熾々と新緑に映え、遠くの
方で苗賣りの長閑な聲さへ聞える。

足下には先刻、隣家の子供が落ちていつた
のであらう「パン切れ」を、蟻が一匹、煙の
軌の中で右往左往して、自分の身に比して見
上げる山々、見下ろす谷々、重荷を負ふて昇
つたり降つたり、苦勞の限りを盡して居る。

私はしばしそれを凝視してゐた。

やがて蟻は遂に黒かたまりとなり、よく見
ると大喧嘩となつてゐた。

見にくいこゝにも「パン切れ」の争奪戦、
誰許人戦社會と何等變らぬ切實の生涯戦、然
も現實其場での生命取りだ。



事實私の叔母に當る人は、三州で淨靈庵と申す寺に庵主となつて居りましたし、只今では其弟子が叔母の亡くなつた後、庵主になつて居りますが、先年私が巡遊で其の地へ参りました時なども「貴女は何時此寺へお入になりましたか？」と笑ひながら言はれた事もあつたくらいで、私は子供の時代から、どうやら父の血を多分に受繼いで居るやうな氣が致しますが、それが舞臺人として立つてゐるのが

不思議にも思はれます。

品川の海から漁師達が、どうかすると大きな正置塀を擔へて持つてくることがありますと、父はかならず言値で買つてやつて、それにお酒を澤山飲ましては又海に放つてやりました。

それは疊二疊敷くらゐの大きなくのもありましたし、それより少し小さいスツボンと言ふのもありました。お酒を一升、スへ入れて口の處へ持つて行きますと、さも嬉しうにグツ／＼音をさせて三升ぐらひはすぐに呑んでしまひます。私は子供心に惡ろしいものゝやうに思つて見て居りましたが、それがすむと父が疊で申の處に大字の符號を置いてやり、それを又漁師が遠くの海へ船で漕ぎに行くのですが、一度父の慈悲の裏を潜つて、淺い處へ漕したために、激激へ出られず一日二日たつてま／＼して居る正置塀を擔へて、かねての手筈通り香具師に賣りとばしてしまつたといふやうな事件がありましたので、それからは放生會の時は店から二、三人

私は憎い首領とも覺える奴をめぐけて唾を吐いた。其のため二、三の鰐に咬え苦しむ遂に溺死した。鰐争闘は止まぬ。

×

人よ。——元來鰐は二分にも足らぬ小鯢だ其の千分の一か萬分の一の大きさを持つ眼で萬物靈長たる我々人間を何と見、何と想像するであらうか。

彼等から云はしむれば、我々人間共は如何に巨大な、然も身勝手な存在ではなからうか。

遠慮會釈なく何處でも横着勝手、彼等の生命など眼中にない。

私の鰐意の、然も突然吐いた唾は、彼等には餘りにも急な且つ恐ろしい大水水だ。又彼等を踏みつぶすべく私の足の蹴く音は、大地、鰐の地獄の大喧嘩だ。そして私のこの足こそは大山嶽の大崩潰だ。

×

鰐は一時に人間の全貌を見る事はできぬが一部分、部分を眺め、然して全體を想像する

目附役が隨いて大海へ渡しにやることにしてからは、無事に正穀坊は大きな體を、三升のお漕にはるよい機織で嬉しそりに海を泳いで行つたと聞いて、父は非常に喜んでゐました。その頃何んにも判らない子供私でも、よく來世とか未來とかいふ事を、折にふれ聞かされてゐたものでしたが、その時も父は龜の



菩提樹の話

原田萬吉

(齋藤清畫)

背中に書いた御名號の功徳で、來世はきつともつと良い物に生れ變つて來るよ、とよく私達に言ひ聞かせてくれました。秋が來て龜の音を聞く頃になるとかうした在世の眞の父の面影が、一つ／＼浮び上つて來て私を懷しませてくれます。

印度にだけの菩提樹
印度に旅行する人々は巨大な菩提樹が、多い。しい氣根を地に垂らしてゐる壯觀さに目をみはるであらう。しかしこの樹は印度だけにしか育たない印度菩提樹であつて、我々が普通に菩提樹といつてゐるものとは違ふのであ

る。釋迦如來が修行なされたのは、勿論この印度菩提樹の下でなされたものである。この樹は實に大きく、小山のやうな感じのするものが印度の到處にあつて、この樹の下にゐれば澤山の人が一緒に雨除けが出来るし、炎天下にあつて樹蔭の下に憩へばその涼しさは又特別である。

だけの智慧はあるだらうか。又蟻は遙く美しく高く聳ゆるあの秀麗の富士山を見る事はできるであらうか。否々、之等は皆、彼等の肉眼と智慧では覺えないとされてゐる、だから蟻界にはあの秀麗な富士もない、人間もないのだ。

小春日和、ボカ／＼と浮かれて三々伍々、折角の散歩中に踏みつぶされても蟻は何者にもやられたか全く知らない。

然らば人よ——蟻界より見た人間の足指位に當るものは人間界には何であらうか。

更に更に、蟻界にはかつて見れないあの秀麗な富士に相當するものは人間界より云へばそも何に當るであらうか——。

私は或日風が餘りに強いので庭を見廻りに行つた、吹き倒された雜草が、いつぱい我子としての種子をまき散らし、根の一部でしつかと大地に未練氣にしがみつきの、右に左に泣き叫ぶかのやうに咆哮し、奔弄され大自然に反抗してゐた。

印度菩提樹は桑科の常緑大喬木で、臺灣にある榕樹(私名ガジュマル)とよく似てゐる。榕樹は臺南附近に多く、これも氣根が地に垂れ下り壯觀を呈してゐるが、その規模の雄大さに於ては到底印度菩提樹には及ばない。

現在普通に菩提樹といはれてゐるものは支那の原産で、七八百年の樹齡を保つ田麻科の落葉喬木であつて、この印度菩提樹とは科屬も違ふ別のものである。恐らく昔の人が名稱だけで同じものと看做したのであらうと思ふ。

わが國には人皇五十代の御宇、今より凡そ千五百五十數年前に傳説西が宋より歸朝の際、菩提樹の苗を携へて來たので初めて傳來された。そして先づこの苗を長崎に植へ、更に種を九州各地の巨禪寺に播いたので、その後段々と擴まり、九州四國その他の各地に普及したものである。

菩提樹と同屬で最も似てゐるものに、九州中央山脈にヘラノキ一名九州菩提樹といふのがあつて、これは九州だけに見出される珍木である。又樺太と極く稀れに四國の石槌山と

にはシナノキといふ矢張りこれと同屬のものがあつて、要するに内地に野生として存する菩提樹の種類は上述の三種である。

又朝鮮には朝鮮菩提樹といふのがあつて全羅北道の來盛寺にはその境内に約三百年位経つた老樹がある。又平安北道義州から七、八里北方の漣州といふ所の山林一帶に漣州菩提樹といふ珍木が澤山にある。

その他各國に産する種類を挙げれば、マルバ菩提樹、アオバ菩提樹、ウラジロ菩提樹、アムルノシナノキ、アメリカシナノキ、クハノハ菩提樹、ハルビフオリヤ菩提樹、カルフオニヤ菩提樹、ノラジフオリヤシナノキ、タケシマシナノキ等がある。これ等は全部小生の植物園に栽植してあるので、研究や參考の資料に入用の節は御申込み次第青々とした枝葉を進呈するから御申越されたたい。

佛像は大低ヘラの木

或る骨董屋の店で、土間の隅の方に蟲が喰ひ、すでに半腐れとなつてゐる木の佛像を見

もう既に秋も酷たのに……

又或野分の強い朝だつた。

大切にしてゐた雁來紅は既に夕の風に吹き倒され、然も雨に根迄洗はれ、我子の種子は思ひ様撒いて心置きなく死んでゐた。

悟りきつたかのやうに……

或夏の朝だつた、

私は餘りに犬の泣く聲に眼をさまされ庭へ出て見た、そこには一匹の見知らぬ小さな汚い野良犬が全身戦かして毛を逆立て泣いてゐる。庭の隅にゐる私の家の「シエバード」に吠えたとゝあるのだ。

然し身長三尺もある巨大な「シエバード」は、どこ吹く風とばかりに我れ關せず、知らん顔して、あらぬ方を向き平然たるものだ。

小犬は何を泣くのか、何故恐れるか、然も私の邸内へわざ／＼無断で入つて來て、其上自分自身は、く／＼つてはなく自由の身體なのに……

私はこの巨大な犬を連れて、よく目黒不動尊から五反田の方へ散歩に行く。

たので、これを購ひ某氏に鑑定を依頼したところ、これは支那から渡來した佛像であるといふことであつた。そこで佛像の本質を調べてみたら、疑して菩提樹であつた。わが國で創られた佛像はいへろノキかシナノキの材のものが多く、鑑定の上から云つても、その本質をみるとすぐ解ることであらう。

菩提樹はどの種類でも材質の色が白く、軽く軟らかであるから、佛像や佛具等の細密な彫刻の材料にするには最も適してゐる。一寸見ると桐材のやうで美しく、且つ木目が鮮然としないので、簞笥その他の蓋物材ともなる。へろノキ材を薄く剥ぎ、端に鍍金をつけて附本として使用されてゐた。今でも炭火から火をとる場合に用ひられてゐる。

へろノキの樹皮は水に漬して繊維にして、筑後奥座が作られる。この繊維は古へから着物を編むに使用されてゐたと思はれる。

縁日がたつた大樹の朝露

八女郡上妻村に淨土宗の天福寺があり、その境内に樹齡約三百年位と思はれる大きな菩

提樹があつた。ところがその樹の下では、晴れた日でも午前十時頃に小雨が降るといふので、誰云ふとなく靈木と呼ばれてゐた。そしてこの樹が據まるのと遠くからも參詣に來る人があつて、毎日寺の境内は大變な雑踏ぶりであつた。中には自分勝手な祈願をする者もあつて、靈驗があるとかないとか騒ぎが大きくなつて來た。その内には澤山の露店が路傍に連り、お祭りのやうでもあつた。

しかるにそれから三月ばかり立つと次第に參詣者が減つて自然と誰も來なくなつてしまつた。毎日午前十時頃には降るといふ雨が降らなくなつてしまつたからである。

多分その菩提樹は枝葉を澤山繁らせてゐたので、晩秋の朝露がしたより、それが多量なところから小雨のやうであつたため、かゝる騒ぎとなつたのであらう。この話は今から六十五、六年前のことであつたが、その菩提樹はその後本幹が枯れてしまつて、株から出た蘗木の芽が生え、それがすでに一尺五寸位の太さに育つてゐる。

(筆者は福岡八女郡下廣川村原田植物園主・九州博物研究會長)

あの附近は元大臣とか、大實業家とかの大邸宅が揃ひしてゐる。

私は彼等名士の家族連れにもよく會ふが、この巨大な犬、然も犬としては智識のある、値も高い奴だが名士と雖も眼中にない、勿論見迎へも、振り返りもしない。

私が彼等到大敬禮してゐても、間が悪いと吠えつく。

然しちつぽけな小さな汚い野良犬がやつて來ると、全神懸集めて見迎へ見送る。

×

それは秋雨が蕭々と降る黄昏であつた、頻りに小雀の鳴く聲に私は窓外を眺めた。

一羽の親雀は可愛くてたまらぬげに、二羽の小雀を兩羽に抱え、雨をかばい然も交る交るに餌を拾つて口移しをしてゐた。

私は眼頭が熱くなり、其の行動をしみじくと凝視した。

夕日落ちて暮さす時、あの小雀が青年となつて電線に群れ止まる時、遙か遠い母雀を慕ふであらうか。



鶉ひたき 鳴な く

吉田 絃二郎

二三日からの具合が悪い。夜も幾度か眼をさましては、いろいろのことを思ふ。妻が死んでからこ

つち、自分も何時死んでもいいやうにして置かねばならぬと思ひながら、つひ公證役場へ出かけた

書類を捨てたりすることが億劫なので、まだ何も纏めたことをしてゐない。それがちよつと氣にもなる

三周忌までには故人の俳句を一纏めにして置きたいと思つたが、それも一つ一つの俳句についての思ひ

出がまだ餘りに生々しいので、讀みかへして見る氣にもならず、梓に上すこともしてゐない。故人の形

見の物も四年前と同じ場所に置かれたまゝである。未練らしいと思ふが何うすることもできない。

眞夜中に盗汗をかく。女中達を起すのも氣の毒だ

から懐中電燈をつけて押入の中を探して、着替を見つくる。ぞく／＼と寒氣がする。

部屋の間でも、雨戸の外でもわびしげに蟋蟀が鳴いてゐる。

あの蟲の音もこの世かざりのものだとおもへば多少名残惜しい氣もする。

わたくしは未來といふものに對して決して慾の深いことを考へはしない。結構な未來の世界が惠まる

ればこんなありがたいことはないが、そのまゝ灰になり、路傍の土となつてもいささかも悲しいとは思

はぬ。何の因縁に依つてか、この現世で今日まで五十餘年の間結構な山、川、自然の中に棲み、幾十人

の友をめぐまれ、親を知り、妻を知り、人生のよろ



こびを賦へられ、人生の悲しみを感ぜさせられたのである。こんな結構な世界に再び逢ひ得ようなどと慾深いことは考へない。しかしもし佛の慈悲によつてさらに結構な西方淨土に導かれるとするならば、こんなありがたいことはないが、それは結構過ぎる。わたくしのやうな人間は道ばたの土となり、埃となつて消え失せても、それもやはり佛の大慈悲であると觀念してゐる。

×

妻に死なれた當座は、妻よりも十年も二十年も長く生きて死んでゆく人を見れば、うらやましいやうな氣がした。しかしこのごろでは十年二十年の歲月も亦一睡の夢に過ぎないことをしみじみと感じるやうになつた。

良寛和尚の言葉に「人は死ぬる時死ぬるがよく候」といふのがあるが、その通りである。

後になつて考へると、看護の手ちがひや、手落ちばかりであるが、それも因縁であらう。宿命といふことを信じないではれない氣もする。

盗みをし、人を偽り、人を苦しめて、人にさげす

まれつゝなほ八十九十の長命を保つ者もあり、人に惜しまれ、いとしがられて短命で果つる人もある。宿命といひ、因縁といふ言葉には無量の味があり、悟りの道も暗示されてゐる。

×

生死は人間の力では何うすることもできないが、決して死を急いではならぬ。未來世は長い。だから生きられるだけ生きて、生き甲斐のある奉公だけは成遂げなければならぬ。一日生き延びれば一日の奉公を果すだけの心がけで生きなければならぬ。

世間的には何の仕事をもしてゐない人であつても心がけ次第ではずるぶん奉公をしてゐる人もある。たとへば電車に乗つたとする。そして、快く周囲の人に席を譲つたとする。その行為はたゞ一人の人をよるこばせるのみでなく、周囲の人々の心に、人生についての明るい光明を感じさせる。路傍に嬉戲してゐる無心な子供は何の意圖をも持つてはゐない。しかしその小兒達の無邪清淨な笑聲と姿態もわたくしたちの人生を明るくしてくれる。

悲しみに孤獨の裡に九十年の生涯を生き貫いた



ミケランゼロを見る時、わたくしたちは生きることの勇氣をあたへられる。

祖國のために敢然として散華する若い勇士たちを思ふ時、日本國中の人々の心がいかに嚴肅にされることであらう。

大であれ、小であれ、人は正しく生きることによつて隣人に對し、祖國に對し、人類に對しそれぞれの奉公をしてゐる。

生死は因縁である。いつ死が訪れてもよるこんで死を迎へなければならぬ。しかし生きてゐる間は何かの奉公を怠つてはならぬ。人生は短い。

×

今年十月の四日の朝はじめて庭の樺に鶴の聲を聞いた。同じ日の午後同じ木の梢に鶴の聲を聞いた。年々訪れて来る鳥の聲を日記に誌してゐるが、季節々々に訪れて来る鳥の聲はなつかしいものである。

この二三年秋になつても渡り鳥の群がすくなくなつた。庭の辛夷の實が赤く熟れるころになれば、衰じいほどの羽音を立て、辛夷の實を啄ぎに來たも

のであるが、今年はずでに赤い實は朝毎に地に落ちてゐるが、渡り鳥の群はまだ飛んで來ない。毎年十月になれば庭の櫻の梢に山の鳩が巢を作るが、今年はまだ鳩も來ない。わたくしは縁端に立つては毎日庭の櫻をながめてゐる。

×

多摩の墓地にはいろいろな人の立派な、豪華な墓が並んでゐる。その豪華な墓の一つは大富限者のものである。わたくしは妻の墓に詣る毎にその豪華な墓の前を通り過ぎる。いつもいろいろな名札を付けた美しい花が供へられてゐる。わたくしはそれを見る毎に妻のためにできるだけ美しい花を供へなければならぬと思ふ。わたくしは東京まで出かけて行つて花を購めては、妻の墓に詣ることにしてゐる。

しかし何としても豪華な墓の手向草に比べて、わたくしの妻の花は貧しい。

或る朝わたくしは妻の墓に花を供へるために不圖いつものやうに豪華な墓の前を通りかゝつた。花屋の小僧であらう、半纏着の若者が自轉車の後に積んだ美しい花を供へてゐた。花には一つ一つ名札が付



けられてあつた。

わたくしは豪華な墓の下の下に眠つてゐる人を氣の毒に思つた。

わたくしは妻の墓の前に立つて、さうやいた。

東京 誌友會御案内

左記の如く東京方面の誌友會を開催して、とかく御無音に過ぎ勝ちな會費相互の親睦のため、一夕相談合して愉しい時を持ちたいと存じます。御多忙中とはお察し致しますが、萬障御繰合せの上是非とも御家族、御知友をお誘ひの上御出席下さい。

日時 十月二十三日(水) 午後六時より

會場 小石川區表町傳通會館

講演 増上寺法主 大島徹水臺下

醫學博士 和田正系先生

本會理事長 中村辨康先生

座談會 (司會 佐藤賢順氏)

幻燈 法然上人御一代記 佐藤良智先生口演

會費 三十錢

法然上人鑽仰會

「妻よ、わたくしの花は貧しい。しかしお前は貧しい花に添えられた孤獨なるわたしの涙を受け容れてくれるであらう」

十月十日催された

東京 本會有志懇談會

本會では去る十月十日午後七時半から小石川區表町傳通會館に於て東京市内外本會有志の懇談會を開催いたしました。同會は先づ理事長中村辨康氏の挨拶に始まり、大い地主事佐藤賢順氏の事業報告並に方策について説明した後、出席諸氏から種々有益な意見開陳があつて、同十時散會いたしました。尙種々な御意見は要するに會費獲得に時局下の本會實踐に關する熱烈な御希望や御忠告であつて、本會としては充分これ等諸氏の御意見に従ひ、今後ますます會の發展に努力することを申し合せました。因に同日出席せられた諸氏は次の通りであります。

中村辨康、高瀬承殿、成田昌信、佐藤良智、中村康隆、濱田義光、山田信鏡、糸山天眞、奈良辨覺、竹中堯猷、長谷川良弘、佐藤賢順、他本部員四名。



雁 がん

と蛙 かへる

みづく

宮澤雅夫 作



○

お山のお山のすうと向ふのお山の上に、
かへるのお池がありました。

秋になつて、そろ／＼冷たい風が吹き始め

たので、お池の蛙たちも、いまは皆な岸の穴
の中へ、ぐりこんで、頭だけをちょいと出し

て、鈴虫や松虫のやつてゐる夜の音楽を聞いて

ゐたところでした。するとそのとき、丁度

空を通りかゝつた雁が、お池の水をのみに、

皆なでガヤ／＼と飛び降りてきました。そし

て雁達は、
「——おい／＼！ 邪魔だ／＼！ どけよ」

と大いばりに言ひました。蛙達は、びつくり
して、小さくなつて、

「——ごめん／＼。静かにしてゐるから、

かんべんしておくれヨ」と頼みましたが、

「——えゝいッ！ ぐず／＼言ふとこの口ば

しで、つツつき殺してしまふぞ——」と、

ゆるしてくれませんでした。さあ、蛙たちは

困つてしまひました。こんなに寒くなつた晩

に穴から外へでようものなら、皆な一度に風

邪を引いて死んでしまふかも知れないのに、

出なければ雁につツつき殺されるとは、情け

ないことになつたものだと思ひになつてし

まひました。

○

すると、それを木の上からち／＼と見てあ
たお山の中で一番利巧な、おしやか様のお弟

子の「みづく」が、

「おい／＼！ ちよつとお待ち。雁さんは弱

いものいぢめをしてはいけないヨ、蛙さんは

泣かないでもいゝんだヨ、さあ、私の言ふ事

をおき。」

そう言ひながら、舞ひ降りて來ました。

「——どうすればいゝンですかネ？」

「——みづくさまお助け下さい！」
「よし、よし、静かにしなさい。」

そこで、みづくは、空を指さして、

「さあ、君達のどちらか、あのお月さまを、うまく抱けるかネ、上手に抱けた方が言ひ分を通しなさい。」と教へました。

「な—んだ、わけあるもんか。」

雁が言ひました。

「……………」蛙たちは、黙つて考へこんでしまひました。すると雁は、

「さあ、お前達には出来まひ、先によつてみる—」と、又も蛙をいぢめ始めました。

お山の上には秋の青い月さまのいとお月さまが、で、明るい夜でした。ふと見ると、お月さまは、蛙のお池のまんなかにも、まんまるく浮んでゐました。蛙たちは喜んで早速、みんな手をつなぎ合ひました。それから、お池のまん中へ泳いで行つて、みづくに、お月さまを抱きかゝへました。

「おや、おや—」

「どうです、雁さん—」蛙たちは一寸いぼりたくなりました。すると雁達は顔色をかへ、

「よし、いまにみてゐろ—」と、



言つたかと思ふと、みんな羽を振つて高い空へとび立ちました。

○

さあ、蛙達は又心配しだしました。

「雁は羽もあるし、力もあるから、いまにきつとお月さまを抱いてやつてくるにちがひない—」そりなつたら、このお池をおひだされなければならぬ。困つたことになつちやつたなア—」

心配しながら、空を見上げて待つて居ましたが、お月さま目がけて、一列になつたり、かぎの字になつたりして飛んで行つた雁達は、黙つてくるどころか、終ひには雲にかくれてとうとう見えなくなつてしまひました。

「なあんだ、雁なんて馬鹿な、口ほどにもない奴だなア—」

蛙たちは急に元氣をとりもどして雁の悪口を言ひはじめました。するとこれを聞いた、みづくが、

「おい—、悪口を言ふものではないヨ、蛙」



さん、お前たちは雁に勝つたと

思つてゐるのかネ？」と言ひ

ました。蛙は不平な顔を

して、「——勝つたとも

さつきお月さまを抱い

てみせたぢやありませんか？」と、ぐ

ず／＼言ひまし

た。そこで、み

づ／＼は、

「蛙さん、いば

ることはできな

いヨ、さつきお

前たちが抱いた

のは、あれはお月

さまのかげな

よ。ほら空をみてこ

ら、お月さまは高い／＼

高い、みんなの手のとどか

ないところにあるのさ。

「——狐のある雁でも、いけな

いところですか？」

「そう／＼、誰も行けない高い／＼ところにあるのさ。雁は、いまごろ、いばりちらした

ことを恥かしがつてゐることだらう。お前たち

ちははじめは泣きそうな顔をしてゐたくせに

一寸何か出来ると大いばりをしようとするその

心もちは、けつして善いことではないんだ

ヨ判つたかネ？」

「——みづ／＼くさま、ほんとにスミマセンで

した。」

「あやまらないでもない／＼んだヨ、判つたら静

かにおやすみ……」

丁度その時、秋の夜が静かに明けそめてあ

ましたとき。

(野水昌子畫)

陸海軍慰問浄土雜誌

寄附者芳名 (略敬稱)

三十圓 兵庫縣武庫郡親王寺中 細谷 コウ

二圓五十錢 奈良縣中庭村 福本 君枝

一圓二十錢 横濱市神奈川區源藏 八城 千代
三圓 大阪市西區北堀江通 若林與惣吉



鳥取縣 菅原 國去
ふりかざす御顔もなく像の秋

群馬縣 北條 祥雲
相富古びた木彫の不動尊が想像され
中七字のもつ敬虔な態度、並に
特長の描へ方、下五字の新鮮な表現
をとる

群馬縣 北條 祥雲
朝の日のさし初む庭の藪の聲

秋の夜の静かなことは誰にでも感じ
られる。それは反對である一朝の
日がさす」といふ反對な見方をして
其處に特殊の静けさを描き出してあ
るところに新しきがある。

和歌山 南 武夫

前栽の秋にさきがけ藪の聲

群馬縣 北條 祥雲
前栽に虫の聲が微かに聞える。庭の
どこにも秋が來てあるといふ様子
は見えないが、虫の音を先頭として、
もう秋がしのびよつて來たのであら
うと驚いてある作者を想像出来る。

京都千代川村 前田 石風

蠅の音に寂たる我となりけり

東京玉川 五島 實城

蠅は露になびきて壁澄む

青森市 高松 竹堂

遮断機によりて蠅の音整へる
今治市 三木 光子

父母とおぼしき二人蠅迎
岩岡市 長岡 白朝

月の道右も左も芋蟲
東京竹 中如月

風鈴は墓にからまれ秋たくる
名なし 草

朝夕を糸瓜に笑ふこと多し
京都 錦木 白舟

琥珀の月ゆがみてをればそら寒む
愛島 吉野 法泉

長鼓の音止み相もなし今日の月
横濱市 小宮 風平

初夏の午後三時の賑へる
大阪田中 秋芳

涼しさの峯高らかに夏の朝
北支那道車 桑原 吉男

秋草を此處に手向けぬ馬の墓
徳島縣 丸岡 長壽

野分して山あらたなる緑かな

東京松岡 成泰
爽涼のしよまを桐の一葉かな
東京市 一 ばき

二つ三つ青櫛おちて裾あらし
札幌市 執行 霞

町の人秋のみのりに胸を張る
堺市 佃野 笠井 松枝

秋愁の頬にたれたるほつれ髪
京都市 永田 七郎

秋雨の日は閑なり踏切番
徳島縣 海部 山人

蠅の縁にもなくや月の夜は
本所區 渡井 まき

白粉の花の香に残るかな
名古屋 堀場 典雄

風風の事なく去りて今朝の秋
豐後縣 山元 兵馬

頼戸を出てそら歩き良夜かな
仙臺 秋月 酒子

秋もはや夜をさびしむ温泉の町
栃木 萬壽 云海

栗實の風の吹くなり樵夫徑
岩手縣 志賀 静江

蠅さかりの村のお盆はのぼされし
北海道 加藤 潤隆

風鈴の音ばかりなり秋澄む
新蕨市 北田 皓月

はてもなく田の面は青し空の秋

岐阜縣 重野 ふみ子
涼風になびきて萩のあはれなり
京都市 新藤 玄盛

蠅の日に茶店の先の吊柿
大分縣 石堂 柑山

秋寒を摘むにやうやく月がさす
新蕨市 河原 生

見返りて花野のつどくつかれかな
東京 齋 朗生

月に居て盆太鼓きく一人
下關 關野 公孫

明月の汽船は瀬戸の波を切り
名無 草

石燈籠かくれてかなし萩の花
山梨縣 井土 豊

雪折の音のひよきて別酒
山梨縣 原 一幸

踏み行くも踏まぬも草の紅葉かな
北海道 花田 順往

月さゆるほどに虫の聲暗し
東京市 づ ばき

退院の母をむかへに初拾
高知縣 横山 亮菊

いたゞきし御酒あたゝめて紅葉かな

投稿規定

官製はききに一回二句以内
とし「淨土」編輯部併置係
あてに送ること。



御佛間の移築完了に際し

静寛院宮さまを想ふ

渡 邊 得 男

り難い次第と存じます。依つて兩者は紀元二千六百年記念事業と致しまして、この御佛間を増上寺本堂前に移築の計畫を立てたのでございます。本計畫に

鑑し、畏くも

皇后

皇太后

先般來靜寛院宮奉養會で計畫中であつた御佛間の移築が完了し、十月二日の恒例御法要當日に其落慶式が執行せられましたので、經過の太略をお話し、併せて宮様に對する崇敬仰の赤誠の一端を申述べられますことは私の最も光榮と致すところであります。

抑も此御佛間は宮様が明治七年から同十年八月御薨去になる迄の間御住ひになりましたる禪布御殿の一隅に建立せられまして、宮様は朝に夕に此増上寺の森の間にほの見ゆる御夫徳川家茂將軍の墓所に對して有髮の尼とおつとめを遊ばした由緒の最も深い建物で

あります。宮様の御薨去後、春風秋雨六十有餘年、其間禪布御殿内には幾多變遷がありましたが、其間にも傷らず、獨り此教誡に富んだ御佛間ばかりは舊態其儘東久邇宮邸内に残存して、さながら往年を物語るものゝ如くありましたのは誠に感激に堪えないことであります。今同宮内省に於けられては奉養會が多年宮様の聖體宣旨に努力して來りましたこと、増上寺は靈廟所在の緣故地たるの故をもちまして特別の御説教を以て、本年三月兩者に對し此由緒ある御佛間下附の恩命を下されたのでありまして洵に有

り難い次第と存じます。依つて兩者は紀元二千六百年記念事業と致しまして、この御佛間を増上寺本堂前に移築の計畫を立てたのでございます。本計畫に

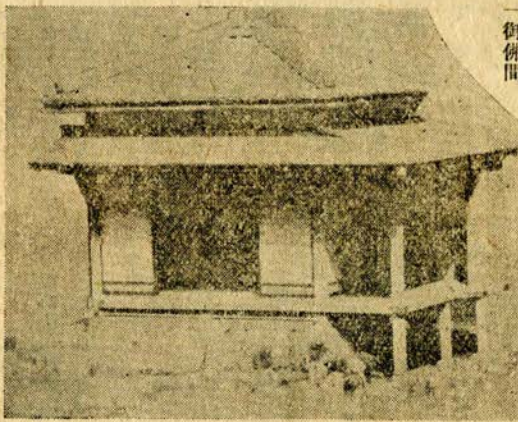
兩陛下に於かせられましたは、深く靜寛院宮の往事を偲ばせ給ひ、且つ又隨く國民教育に及ぼす影響をも御教誡遊ばされ特別の恩召を以て金一封を御下贈あらせられました。聖恩深遠海に恐懼感激に堪えざるところであります。尤も從來本會に多大の好意を寄せて居られた十數名の特志家の寄附金により工事を株式會社清水組に依頼しましたところ清水組は親躬下野に工事を進めてくれ蕭々進捗し、十月二日を以て移築落慶式を舉行することを得

るに至つたのであります。茲に謹んで寄附者、及び關係各位に深甚の謝意を表する次第であります。なほ十數年前に本會を創立し、宮様の御恩を宣揚する事に努力せられた故、澤澤子爵も定めし地下に於て喜んで居らるゝ事と存じます。

靜寛院宮様の御一生は三十二年の短い年月でございました。しかも其短い御一生の間に表はされた御聖徳は實に我々一億同胞の信仰讃歎づく能はざる處であります。宮様を日本婦人の典型と申し上げ、又は我國婦人の最高峯と稱へまつるのも實に故あるかなであります。宮様の御一生のお事蹟は詳はしく申述べますれば一冊の大きな本になる位であります。到底この誌上では申上げられません。殊に私の如く産業界で働いて居ります者で淺學の者には尙更ら困難な事であります。

私が宮様の御事蹟の中で特に深く敬意を表し、心の底から頭の下がるのは第一に宮様が實に完全な婦徳を備へて居られた事でありま

す。第二は宮様が犠牲の御精神、即ち人として最も立派な、最も高い道徳である犠牲の御精神に充ち満ちて居られ、且つ此精神を實現移築された御佛間



實行遊ばした事であります。

第一の完全な婦徳を備へられて居られた事は公武合體と云ふ政治上の理由よりして、徳

川幕府から朝廷に對し、十四代家茂將軍の御臺所として宮様の御降嫁を願ひ出でたに對し、宮様は始め御承諾にならなかつたのでしたが後に側近の方々より御願ひ申上げましたところ、後に申上げる、天下國家の爲にと云ふ尊い御精神より終に御承諾になり御年齒か十五歳の御時に京都を後に遷り東の方江戸へ御下りになつたのであります。京都御出發の時の御歌に。

この處は得こそかへられ行く水の
清きころは涙みて知りてよ

とあり、中仙道を御下りの途中には

すみなれし都路出で今日幾日

急くもつらき東路の旅

遠ざかる櫻と知れば旅ころ。

一夜の宿も立愛かりける

とありますのを拜誦しましても宮様の御胸の中が何はれるのでありまして暗涙を催うすのであります。

しかし江戸にお下りになり、感々家茂と御

婚儀が済みました後は實によくお仕へ遊ばされ、其間所謂琴瑟相和して外に拜見するもお羨ましい程でありましたさうで、殊に當時徳川家も内外實に多事多難で、家茂公が年若でありながら國事の重任に憚む姿を御覽になつてお詠みになつたと思はれる御歌が幾つか残つて居ります。

なすわざもなき身なれども君が爲
亂れあらじと世を祈るかな

君がからになるよしもなき
これを拜見しましても宮様が如何に夫君によくお仕へになられたかが拜察出来ます。次に宮様には世に謂ふ婦があられました。それは十三代將軍家定の御臺所であつた天璋院と申す方でありまして、始めは宮様に好感を寄せて居られなかつたやうでありましたが、宮様の己を空うして御始に仕へられる眞劍な御態度、御心構に感服して後には萬事について宮様とよく御相談になり御やさしくせら

れるようになりました。宮様は御始にも心かななる孝養をつくされたのであります。

以上の事を以て見ましても宮様は心に進まぬ御結婚であつても一旦嫁した以上は妻として臨として全身の誠を盡して夫君に仕へ御始にお仕へになると云ふ、我日本婦人として完全なる婦徳を發揮されたのであります。

第二は宮様は犧牲の大精神の體化とも申して差支なき御方と存じます。前に申述べましたやうに宮様の御降嫁は公武合體と云ふ政治的の御結婚であつて、當時徳川幕府の威力衰へ、外國よりは通商開國を迫られ、國內に於ては親王の土が四方に洩起し物情騒然、所謂内憂外患交々至ると云ふ状態でありましたので、幕府は局勢展開の唯一無二の策として公武合體、即ち朝廷と幕府と合體し協同すると云ふ策を立て其實行方法として宮様の御降嫁を朝廷に頼つたのであります。朝廷に於かせられては始め種々の理由より時の陛下、宮様の御兄君なる孝明天皇は御進みにならず、

宮様も固よりお進みにならなかつたのであります。が、昨本の爲此難局を切り抜けるには此幕府の願ひ出をお許しになるより外にない事でありました。こゝで宮様は御自分の身によつて國家が救はれるならば犠牲にならうと固い御決心をなされたのであります。

惜しまじな君と民との爲ならば

身は武蔵野の露と消ゆとも

御年僅かに十五歳、九重の雲滲き所に御育ちになりながらもかくも君の爲、民の爲にと固い御決心を遊ばされた宮様の御心事を拜察致す度に私は常に暗涙に咽ぶのであります。

後五年を経て、家茂將軍は長州征伐の陣中に於て歿し、十五代慶喜公の代になり朝敵の名を蒙り官軍は關東征伐に東海、東山、北陸の三道より江戸を目指して進軍して來たのであります。此時に宮様は御自分の嫁した徳川家が朝敵の汚名を蒙り、其上征伐の官軍が進んで來ると云ふので非常に御心配になり討伐軍の參謀長榎本小將に宛て御手紙をお書きに

なり老女を使として差し
出されました。

其の御手紙の大要を申
せば、

「今回喜がなしたる事は重々相済まぬ。征伐を受けるは何とも致し方ないが、只徳川家が朝敵として扱はるゝは實に残念である。何とかして家名だけは立つやうに計つて置きたい。是非共官軍を惹向けて取り潰すなら自分も當家滅亡を見て生きて居る氣はない。自身は一命を捨てる覺悟はしてゐる。この身は惜しくはないが朝敵と共に身命を捨てるのは朝廷へ對し奉つて申しわけない。私の心中を御察しの上何分よろしく御取計らひ願ひ度い。云

御童形
鏡樣人形



云」と。
何と云ふ悲壯な御覺悟、立派な御態度でありませうか。

宮様の身を以て徳川家を救ひ度いと云ふ此御熱誠が朝廷に通じ江戸城の明け渡しも無事にすみ、江戸百萬の人々は戦火より免るゝ事が出来たのであります。宮様は此犠牲的大精神を以て徳川家の社稷を全うし江戸を助けた太恩人であります。

今や我國は實に開闢以來未曾有の國難に直面致して居ります。

我々同胞は眞に一儼一心になり各其職場を爭つて此難局を打開し、以て東亞親睦序建、大東亞共榮圈の確立なる國策の遂行實現の爲に邁進せなければなりません。

殊に若き女性の方々は此宮様を立派な御手本となされ其美しき婦徳、烈々火の如き犠牲の大精神を深く感得せられ此非常時日本の女性としての任務を立派に御盡しになれる事を熟望して止まない次第であります。

(筆者は靜寛院宮親實會常務理事、日本麥酒株式會社常務取締役)

佛教
映畫大乘だいじょうの國くに

東寶國策映畫協會作品

製作

總指揮

池永浩久

脚

田中純一郎

監修

高楠順次郎

構成

圓谷英二

原作

山中厚嗣

製作

鷹村 勝

演出

藤本修一郎

撮影

平野好美

同

高坂利光

音楽

飯田信夫

時代考證

宮地政荷

佛畫揮毫

武藤契舟

佛蹟畫揮毫

矢崎千代二

解説



皇道の宣揚は日本佛教の弘通と相伴ひ
 恰も唇齒車の關係に在りと言ひ得る。
 本映畫は日本佛教史に基く記録映畫「大
 乗の國」で内に在つては日本佛教の眞價



を顯揚して、以て國民精神の作興、信念の樹
 立に資すると共に更に又、外にあつては、東
 亞新秩序建設の大業に大いに貢獻を期する所
 あらんとして作られた。本映畫は東寶國策映



畫協會々長池永浩久自ら此れを指揮し、此れが映画化に全精神を傾注し、又日本佛教學果の權威として著名な、文學博士高楠順次郎氏は特に本映画の指導機関にあたられた。そして又財団法人佛教聯合會を始め各方面の支持後援を得て昨年四月八日あたかも大聖釋尊御誕生日記念日より關西、關東二班に分ち、大々的の製作開始を行つたものであるが、撮影

班は先づ北國金澤に於ける釋尊御誕生記念花祭りの撮影から始まり、福井の永平寺、甲斐の身延山及久遠寺、高野山さては四國の瀧渡池、比叡山から奈良方面に入りて法隆寺、東大寺等々に於ける史蹟、國寶物等一切收録、更に京都方面には國寶的著名な各寺院は勿論の事、未だかつて世に公開されざる絢爛たる秘藏繪卷等を巧緻のキヤメラに苦心の結果

一切收録、一方關東方面は帝王博物院に御所藏なれる國寶繪卷、釋尊像等を特に撮影をさし許され、江戸時代に於ける史實記録の撮影を始めとし、又長野の善光寺、鎌倉の史蹟、千葉方面日蓮上人史蹟等々、数多く撮影收録し、撮影開始からその完成に至る本年四月迄四季を通じ、實に一年有餘の歳月を要したのである。然もそれはあくまで嚴正なる史實に



寫眞説明

右は奈良東大寺の大佛右下は奈良法隆寺五重塔撮影スナツブ右は上同法隆寺の壁畫右下同つて右が高楠順次郎博士、左が池永浩久氏

念佛する心

淨き友
の　會

坐談會聽聞記

せんべい一枚

石川己之助氏「たしか高島米峰さんのお話だつたと思ひますが、

いつでしたか、親孝行について何

つたことがあります。小さな子

供はせんべい一枚を貰つて無性に

嬉しがる。しかし、親の大きな慈

悲は仲々分らない。煎餅一枚より

も、もつと／＼有難い恩には氣附

かない。親孝行したい時には親は

なしで、それが分る頃は餘程経験

もつみ苦勞もして人生の真相が看

込める頃で、その時は大方は既に

親を失つてゐるので、全く我々は

今に至る迄如来さまの大きな慈悲の分らざること、煎餅一枚の愛を喜ぶ子供みたいなのだ、とつくづく思つたことでした。」

中村師「餘りに大きな音は聞えない。餘りに數多の色は無色である。全く人間の惨めさは覺感性のみならんやで、一枚の煎餅の愛は分つても、永い辛酸の育成の恩は分り難いものです。併し煎餅一枚の愛すら、世には分らぬ者も多い。假令儼かなことのやうでもそれがやがて天地の恵みに徹するはじとなることだと思ひます。所謂開示悟入であつて、信仰も初めは幼稚

なものから次第に深みに入つてゆくものです。初めは玩具を用ひてもよい。先づ深高な教理を容易く開示することが必要でもあるでせう。」

目鼻をきりて

新井嘉門氏「不斷煩惱得涅槃と申しますのはどのやうな意味でせうか。どうも煩惱の斷ち難いことのみ分つても、涅槃の教には近づ

く所か遠ざかつてでもゐるやうな

心もとなさる覺ゆる許りです。」

中村師「一體涅槃とは佛の境地

でして、從つてそれは煩惱の無い

即ち漏盡の世界なのですから、煩

惱を斷盡しなければ、入り得ざる境界なのです。然しそれは實は聖道門流の考方なのです。淨土門の教はさうは申さぬのです。我々は「煩惱具足の凡夫」なのだと思はれてゐます。煩惱とは抑々が人間の根本的な生の欲求、生への執着に根差してゐるものですから、此の生存競争の世にあつて飽達生拔かねばならぬ人間にとり、これ程とり除き難いものはないでせう。寧ろ取除く斷盡するといふ考へ方が既に本當ではないのではな

いかと思ひます。法然上人は、我々が妄念を起さず念佛しようとするのは恰も生付きの目鼻を取離つて念佛しようと思ふやうなものだ、と言はれ、また「念佛の機はたゞ生れつきのまゝにて念佛をば申すなり」とも

言はれてゐます。つまり淨土教では煩惱の斷盡を説かず、煩惱具足の儘に煩惱を超える道を説くのです。不斷煩惱得涅槃分とはそれを指します。心をこめて南無する一刹那は、無我の境地にあるので、假令それが一瞬間でも無我の氣持になれば、その時には我執も我執より生ずる煩惱も消失せたまゝとなりませう。即ち南無とみ佛に歸依する時、煩惱は淨化されるのです。勿論、失くなりはいらないだらうが、常に念佛に依て生くる時、煩惱の身の儘に涅槃分を得た姿が現示されることでせう。一念に一度の往生をあてをきたまへる願なれば、念ごとに往生の業となるなり」と上人は言はれてゐます。

よく世間では、此の世で人が眞に心より念佛を申し得ればその度、極樂の蓮の花がボツカリ開花する

と申しますが、念佛する姿はそのまゝ佛に光被せられ、佛力に生かされ、佛國に生れさせられてゐる姿でありませう。」

分 相 應

新井氏「涅槃分を得る、といふ分とは、一部分なのです。」

中村師「分は自分などを使つて、持前の意にも部分の意にもなる。分相應とは自分の力に達した丈の意で、誰しも不相應なことは出来ない。群盲の摸象の如く自分の力でしか他を推量し得ないのが人間の實際です。いはば分相應を守ることです。そして分に執しないことです。かういふ語があります。盲が夜中立をするといふので宿の者が提灯を借して呉れた。成程眼開が突當つては困ると、提灯をかざして歩いてゆくと、どんと

突當る者がある。此のどう盲め」と相手を罵ると、向ふも負けずに手前こそといふ。盲が腹を立てて此の提灯が見えぬからには手前こそ盲に決つたわと罵つたが、何ぞ知らん、提灯は門口を出ると直ぐ消えてゐたのに氣付かずに、自分

は間違ひなと思ひ込んでゐた譯でした。盲は盲の力の儘に生きることです。さすれば眼開に負けぬ生方も現はれるでせう。番町で眼開盲に物を聞きといふことにもなり得るのです。十五夜でなくては月ではないかといふとさうではありません。三月月でも満月に負けぬ美しさがあります。假令全分でなくても一部分であつても、その姿が眞實であればよいのです。一分の涅槃にしろ、無明に沈淪せる姿ではない。煩惱具足であつても絶えず念佛に依つて生きゆく姿

は、涅槃分を得た姿として貴いのです。」

無 我 と 没 我

新井氏「念佛を申しても仲々自分の心の亂れは去らぬので困ります。時には死にど何の考へもなくなつて了つてゐることもあります。が、無我といふのは、かうした思考の失つた状態を指すものでせうか。」

中村師「それは無我よりも没我といふべきでせう。よく無我夢中と申しますが、心の茫然たる様は没我なので、無我は執はるる所なき生命の姿をさしますから、假令もぬけはた空なさまと念佛三昧の心を形容してもそれは無考といふのではない、心中無一物唯だ佛を念稱することがある許りだといふのです。心は伸々と佛と一

になつて小さな自己にかゝづらふ所ない様が無我三昧の境地なのです。我を失ふことではなく、小我の執着がとりのぞかれた姿です。」

妄念の葦しげく

新井氏「煩惱が深いと言ふのでせうか、私には一時間も念佛してゐても仲々念佛になり切れません。ほと／＼我ながらあきれます。不斷煩惱得涅槃分の教に随つてゆ

けばよいとは思ひますけれども。」
中村師「今日の複雑な世の生活に追はるる者として、心が千々に散り易いも當然です。仲々南無の一念にとけ込めずに、雑念が次々と生れて一つ心に貫き得ないものです。寧ろそれは目鼻を切りとらうとするに等しいかとも思ひます。しかし、かうは言へませう。雑念に氣付くのが、つまりは正念

なのだ。そこに執られてはいけない。ア、之はいけぬと反省し打破つて南無と聲も心も新に唱へゆくことです。法然上人が嘗て大阪の一心寺の岡に居られた時葦のし

げい池に月の宿るを見られて、よく譬に引かれたといふお詞があります。たとへば葦のしげき池に、十五夜の月のやどりたるは、よそにては月やどりたりとも見えねども、よく／＼たちよみてみれば、葦間を分けて宿るなる。妄念の葦は繁けれども、三心の月は宿るなり。雑念のあひ間／＼の正念に立歸つて申せばよい。雑念と取組んでゐるのではなく、顧み／＼して正念に向ふのです。一時間やつて一秒間の正念が得られればそれでよいではないですか。明遍僧都も念佛に心の散るをどうしようと上人に言ねられてゐます。上人も、

それは源空も力及び候はずと言ひ散れども御名を稱せよと勸めて居られます。」

修證一如

新井氏「申しても／＼念佛になり切れぬので終には續けて念佛するさへいやになつて了ひます。」

中村師「念佛申して異つた心的状態に入らと思つてはいけません。道元も修證一如と言はれてます。別物と考へて執られてゐてはいけません。急所々々で正念に立歸り目的地へ心向ければよい。急所とは氣付いた時のことです。例へば東京驛にゆくにしてもさうです。逸れてると思つたら向をかへることです。祈りても願なきこそ願なれ祈る心の誠なければ、又眞剣でないとな氣付いた時は本物になつた時です。」

法然上人が鎮西上人へのお訓にも、妄念止み難きにつけ散亂靜まり難きにつけひたすら念佛せよ、さすれば念佛の徳として妄念自ら止み散亂自ら靜まり三業自ら調つて願心自ら發るものだ、

されば散亂の増す時も妄念の起る時も三心現起するにも三心成就するにも南無阿彌陀佛せよとあります。佐佐木四郎高綱が念佛の時居眠りして仕方がないがどうしたものかと聞かれた時、上人は「目のさめたらんほど念佛したまへ」と申されました。

別時の功德

とはいへ、凡夫の心はどうしても環境に流され易い故に、策勵のため別時念佛を營むのです。數日を區切つて、念佛にぶち込む生活です。朝から晩まで念佛と念佛の

話しかないのですから、自づと妄念の雲はれた心の状態に入り易い。寒の河原の石積ではないが、一寸やつては止め一寸やつては止めては何時迄たつてもうまく行く譯がないですからネ。」

原田氏「雑念は念佛の間々に生ずるから、熱心になるとどうしても念佛が早くなります。」

中村師「別時に加つて申しますと、一時間は雑念に過ぎても後の五分十分は容易に正念になるものです。」

徳本の用心念佛

新井氏「生活が規律的でなく、減茶苦茶をやつてゐるために心が亂れて、妄念雑念が多いのでせうか。」

中村師「一體に日常の我々の生活といふものは雑念の上にあるも

のです。みな散心なのですから、恰も人間に目鼻ある如しと言はれたのです。然し心が雑念に随つてあの事この事と移つても俺といふ者は心底からは仲々消えないやうに、雑念が起つても佛の方へと常に心向けられるやうにしてゆることが肝要なのです。華間の月を眺め／＼してゆくことです。徳本聖人の用心念佛と申しますのは、なむ・あみ・だぶ、なむ・あみ・だぶ、と、一聲の念佛中三邊づつ佛へと心を往復させる申し方です。

それ程の心を用ひずとも、常に心跟まれる時、心背ける時、あお斯る心ではと佛に向向し参らしてゆけば、やがては、つぎはぎだらけの生活も念佛によつて縫合され貫かれてゆくこととせう。」

み佛に染むる心

新井氏「結局、生活を淨めてゆくことがこつてではないでせうか。」

中村師「聖道門では戒定慧の三學に依て生活を淨めて雑念を失くさうとするでせうが、淨土門の心得は異なのです。

自らの小さな力にかじりついてじたばたしてもかなはぬ時のあるを思はねばなりません。電燈の光も太陽の前には輝かぬ。

大いなるみ佛の力に任せてゆくことです。無駄な念佛の一時間と思ふでせうが、實はそれが已を佛に向けてゆく一時間なでした。

雑念が起り心が迷へば迷ふ程からいふ至らぬ自分なのだ、どうぞ如來様よ、と自己の浅ましき姿を反省してゆく所に歸依心が強く起るのです。雑念が起つても悲しむに

は當らぬ。悲しむにつけ喜ぶにつけ怒るとき憐れむとき、心強きにも心弱きにも、常にみ佛の力を仰ぎゆくべきです。

大いなるみ佛の力にひかれゆく我々の足許は豊足なくとも、疑念の要はない、常に歩一歩往生の姿なのだと思ひます。念佛の道に依て自づと戒の姿も定の姿も諦觀の安らかさも現はれて参ります。

聖者たらずとも凡夫のまゝに佛に近づく生活が現はれます。佛名を稱する時に佛の光明大慈悲中に攝取され佛の力に導かれてゆけるのです。

阿彌陀佛に染むる心の色に出でば秋の梢の類ならまし
法然上人の秋のみ歌の如く生きゆくことこそ我らの望みでありませう。」

法然上人

和歌註解(三)

安西覺承

ある。

「通釋」 假の肉體的情欲にもとづくはかない戀の爲にでさへ、互に逢ふにはその身を惜しんだりなどするであらうか……まして、何時の世に逢へるとも知れぬみ佛のみ教に逢うて道を求めるのに、なんでこの身命などを惜しんでをられようぞ。

「感想」 強いお歌である。

上人が讃岐へ配流されることになつた時、門徒が一向専修の義をお止めあるやう勧めたところ、「われたとひ死刑におこなはるゝとも、この事はすばあるべからず」と言はれたといふ、上人のその烈々たるお心持がこの歌にも表れてゐるのである。私共も上人のみ教の流れを掬む教徒であるからには、かうした強い心をみんなもつてゐなければならぬ。教のために心弱くあつてはならない。

「参考」 この歌は玉葉集卷十九には

壽量品、一心欲見佛不自惜身命 瞬命法師

かりそめのうき世はかりの戀にだにあふに命を惜しみやはする

「語意」 ○かりそめの色 色は肉體や情欲を指す。眞實なるものは滅びない。肉體はやがて滅びる所の假の姿である。情慾はその欲の姿に執著する迷ひ心であるからかういつた。かりそめのは假の、一時的なといふ程の意。又かりそめの「そめ」は色の綴語である。○ゆかり 簾、ちなみ。ゆかりに假を譬かせてゐる。○やはする 「や」は反語と係の助詞でそれに助詞「は」がついて反語の意が強調まり、やと係つてゐるのですると連體形で止めたので

逢二佛法二捨二身命二と云へる事を
かりそめの色のゆかりの戀にだに

あふには身をもをしみやはする

とあり、又崇徳院御製として右の末句を「惜しむべきかは」としたのが傳はつてゐるが、後者は出所が不分明である。前者は勅傳

産地から直接

新茶は 本場から 静岡から

卸値で小賣

これは便利だ！
日本一お茶の生産地静岡から直接皆様の
お手許へ何んの混り氣のない純良茶を而
も値段は卸値で五百匁（約三斤）以上お
送り申上げます。尙詳細な案内書は「淨
土」で見た旨御申添の上御請求次第お送
り致します。

案内書送呈

静岡市富町五丁目
清水新太郎商店

東京三三三番
名古屋一〇八番
替振

〔語意〕 ○柴の戸 いぶせき山住居といふ程の意。○あけくれ
曉暮であるが開も繰も戸の縁語。○むらさきの色 臨終に佛菩薩
が來迎される時の雲の色。○みなす 見てそれとなす。

勝尾寺にて
柴の戸にあけくれかゝる白雲を
いつむらさきの色にみなさん

と玉蕨集と何れを採るべきか一應問題を提出するものかも知れぬ
が、勅傳の方は「色のゆかり」といふ極めて巧みな表現をもち、
この玉蕨集は大に劣り、撰述着手の時期に於ても勅傳の方が玉
蕨集よりも四五年先である點の二つの理由から勅傳を採る。即ち
上人作の歌とするのが妥當だと思ふのである。

〔通釋〕 いぶせき山住居をしてゐると朝な夕なにかゝるものは
白雲だ。毎日徒にこの白雲を見ながら過してゐる自分だが、い
つかは本意を遂げたいものだ。一瞥いつ此の白雲を彼の來迎の紫
雲にみてとつて往生の素懷を遂げることが出来るのだらう。
〔感想〕 同じく騰鼓醜流の際、邊鄙を化導できるのは朝霞であ
ると言はれた上人ではあるが、勅免後四ヶ年の勝尾寺託居は如何
にもわびしかりしものに拜察される。併しそれも私共の心の弱き
故の淺賤でもあらう。一沫のもののわびしさが滲ひはするが、わび
しさなど問題にならぬ明るい強い太安心である。それをこのやう
な美しいお歌に拜し得るのはまことに有難いことである。
〔参考〕 勝尾寺は勝津國三島郡豊川村にある眞言宗の古刹であ
る。承元元年十二月八日、勅免によつて騰鼓を出られた上人が
以後四年間託居せられた所。このお歌は玉蕨集卷十九にも漏空上
人作として出てゐる。

長さ六十餘間
の大念珠



宗祖門下は駿才遡足林の如くであつたが、中に於ても、聖光上人と勢圓上人とはその尤たるものであつた。聖光上人の法燈傳持の功績は今更ら言ふ迄もないが、勢圓上人の一枚起請文我請の徳と、祖跡興隆の業績とは亦以

◇…著・名・寺・院・巡・り…◇

大本山百萬遍

知恩寺に詣で

城山生

て没すべからざるものがある。上人が法門相承の上にも缺くところの無かつたことは幾多の文獻の示す通りであるが、殊に上人の師恩を深く感ぜられ、大谷の禪房の興隆を圖りては知恩院となし、加茂の禪宮堂を修營しては知恩寺と號し、實際はいづれも開山に等しき大業を成就し乍ら其の功を續て師の房に歸して宗祖を開山大師と仰がれし謙虛なる態度と圓融戒附嚴の正統となられたことに依つても知られる眞摯なる行持とは、何んとも云へぬ心よさを覺え一入深き敬慕の念を禁し得ざる

次第である。

知恩院が一宗の總本山であり、宗祖本廟の所在地であり、一宗機元の地であることは云ふ迄もないが、加茂の禪房、今の大本山百萬遍が宗祖由縁の地であると共に、勢圓上人興隆の寺であり、安住の寺であり、御往生の幸であると云ふ意味に於て一段の慕はしさを感じて居た次第であつた。一日法話の際この心持を語つた所いたく感動共鳴を得て即座に衆議一決、近きよき日を選んで打連れ参拜、上人の餘薫芳蔭を仰ぎ信機の培養を圖らふでは

ないかと云ふことになつた。

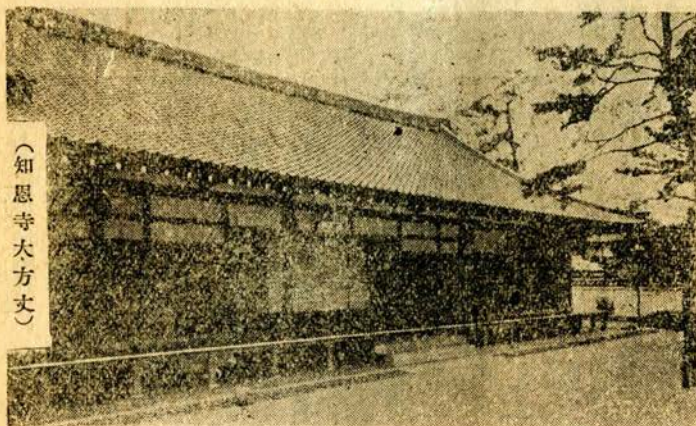
秋たけなはの十月十日、この申合せを實行すべく一行約二十名心地よいそと風と強い陽を浴びながら、市電百萬遍に下車眞直ぐに目指す百萬遍本山へ、松蔭の白砂を履みしめ、本堂御影堂に目線を送りつゝ大文庫を進み、案内を乞ふて來意を告げ、心よく招ぜられて方丈に趣ひ、森執事長さん始め寺務所總出の御接待を辱ふし、御親切なる御案内御説明を受けつゝ、證堂に參拜、八百年の昔を偲んでそとに感涙に咽んだ次第である。

斯くて一同百萬遍本山に對する認識を深め感激を更に新にした譯であつた。

憶ふに本を温めずば末が知られず、根を培ふて枝葉が繁るとすれば、他力淨土に心を澄す同修同行が、祖師を懷慕するは蓋し當然の心情であらう。さり乍ら數多き讀者の中には色々の事情に妨げられて未だ宿志を果さざる方も少くないことと思ふ。斯かる方々へ吾等の感激を御傳へすることは同行の務めなりと考へつゝいた自分は、文章の態をなさぬことを

かへりみる邊もなく一文章して以て貴重なる紙面の體愛を乞ふた次第である。乞ふ讀者了されよ。

閑話休題、まだ參拜なさぬ方々の爲めに



(知恩寺大方丈)

百萬遍全貌の概観からはじめよう。

市電「百萬遍」に下車東行數十歩にして大本山百萬遍知恩寺の表門に達する。境内は一帯に道より四、五尺の高臺であり、表門の前は御影石の立派な石垣で圍まはれ、門前向つて左手に一貳二尺五、六寸般に高さ二十尺

もあらうかと思はれる御影石の大石柱が、それに相應しい二重の臺石の上に建てられて居る。そしてその正面には誰の筆なるか「百萬遍念佛根本道場」と達筆に記されてある。この大石柱は最近建立の様であるが、忌憚なく云へば少しく大に過ぎて門が負されて居る。

思ふにこれが設計者は、少々門が負けても百萬遍念佛根本道場といふこの本山の特色が誇示したかつたのではないかと察せらる。門をくぐれば境内一帯は白砂青松、殊に老樹鬱々として寔に清寂の感あり、眞正面に仰ぎ観るは間口十五間奥行十三間總建造の大御影堂である。均整のとれた全體の形、心よき大屋根の勾配、鳳垂木の彫刻の妙、材質の素晴らしいさ、京都に大伽藍少なしとせぬが當山の大殿

程の建築は……と寺務所の方の御自慢も尤もだと思はれた。表門と御影堂とを繋ぐ眞直の石畳、その左右順ち東と西に、東向きに阿彌陀堂、西向きに釋迦堂（本堂）がある。この釋迦堂と彌陀堂との向ひ合つての配置及びその方向、御影堂の所在は、二河白道の表現ではないかと思はれたが、これは自分の獨合點で何等據り所はない。

釋迦堂は即ちこの本山の本堂で、慈覺大師作丈六座像の釋迦如來像が安置してある。この寺は元今出川北小路の地にあり、加茂の神宮堂と云ひ、釋迦如來像を安置するが故に今出川の釋迦堂とも云つたのであるが、高倉天皇承安五年宗祖法然上人淨土御開宗の後加茂の神司宗祖に歸依し屢々屈請して法談を乞ひ後神宮堂を宗祖に布施し、宗祖一時こゝに住せられたもので、宗祖滅後勢觀上人附屬を受けられ、こゝに祖師の御影堂をたて師恩を知るの意味より知恩寺と公稱されしに創るのであつて、後再三兵火或は類焼に罹り、所在も今出川小路の西、寺町草堂にと移り、第三十

九世光譽親王上人代寛文二年現今の地に三轉せりと云ふ。現在の草堂、御影堂、御廟、勢至堂はいづれも寛文年中の建築である。彌陀堂と御影堂と間に經藏、鐘樓、鐵守堂、辨天堂あり釋迦堂と表門の間に茶所、釋迦堂の前に經塚等が程良く並んで居る。鐵守堂には加茂の御祖神が勧請してあつて加茂と百萬遍との歴史を物語つてゐる。御影堂の後方に大方丈、小方丈、大玄關、寺務所、庫裡、客殿、御居間等形の如く建ち並び、境内の東北隅には勢至堂、御廟等が配置されて居る。而して東西兩側には塔頭寺院を並べて山容を整へて居る。規模極めて大とはいひ難いが、一宗の大本山として恥しからぬ構へである。境内の東南隅に左京方會館といふ建物がある。敷地は本山の無償提供で左京區方會館の經營で諸種の社會時業が行はれて居る。斯う云ふ事業に本山御當局の理解の深いのは聞いて嬉しく思つた。この會館と會館前の空閑地を利用して立派な設備を持つた本山直營の統後保育園があつて、可愛い園児達の眩暈が松籟

に和して流れて来る。子供の天地は美しい。子供の世界は朗らかだ。

已上は外觀の一般であるが、こゝで自分自分の知り得た中では非讀者諸賢に御傳へして置きたいと思ふことの二三を摘記して置かねばならぬ。

その一つは經塚のことである。釋迦堂前にさゝやかな經塚がある。裏面に佛體を正面に阿彌陀經が彫刻してある。目立つ程立派なものでないのを、たとへ氣が付いても阿彌陀經か位に考へて見送して行く人が多いといふことである。所がこの阿彌陀經は普通の阿彌陀經から見ると

專持名號以稱名故諸罪消滅即是多善根福德因緣

の二十一字數の多い阿彌陀經である。かの選擇集第十三章段多善章の下に於て念佛が多善根なることを御説きになつてその文證として襄陽石刻の阿彌陀經を引證しておいでになるが、この襄陽石刻の阿彌陀經と同文の阿彌陀經で參拜された方によく、摩訶して念佛

の信を深められ度いものである。

その二はこの本山の寺號に就いてある。

この本山は詳しくは長徳山功徳院知恩寺と

稱するのであるが、山號に就

ては聞き漏らして歸つたが、

功徳院とは勅傳四十五卷勢觀

上人傳の處に

生年五十六、曆仁元年十二

月十二日、頭北西にして

忿佛二百餘遍、最後には陀

佛の二字ばかりきえて、

息絶え給ひにけり、功徳院

(賀茂神宮堂也)の廊にて

をはり給ふに佛前より異香

薫して臨終所にいたる云々

とある。知恩寺とは同山寺傳

に依るに建保年間神宮堂に師

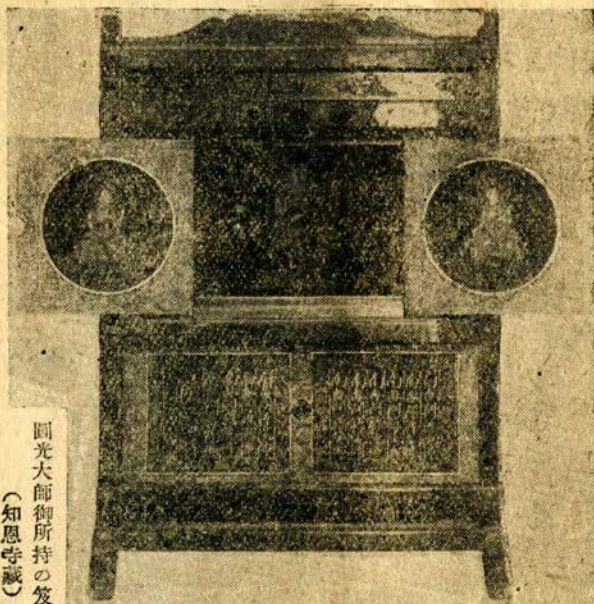
の影堂を修營し師恩を知るの

意を以て知恩寺と公稱されたとある。蓋し知

恩報恩は佛教中の重要な思想で人の必ず心

得べき所である。而も之れを奉じこれを行ふ

ものゝ趣きは概嘆すべきことである。源私奉
公の大切な今日八百 years 前の上人の高風が偲ば
れる。



圓光大師御所持の笈

(知恩寺藏)

その三は皇室と百萬遍の關係である。

この本山の第六世に智慧如一國師といふ方

がある。淨土宗第三祖記主禪師の法孫で小幡

の慈心和尚の上座である。後この本山の第四
世道意上人に從ひて宗風を傳へ次いで第六世
となられた方である。此の師譽一世に高く
畏れ多くも伏見、後伏見、御二條の三帝の戒
師となり、生前已に國師號を授けられた程で
あるが、彼の三帝の御威嚴になる勅修御傳は
蓋し此の師の德に負ふ所が大きいと考へられ
る。

第八世空圓壽阿上人亦道譽一世に高し、偶
々人皇第九十六代後醍醐天皇元弘年中天下に
疫病流行瘡癰を極め酸鼻眼も當られず、天皇
いたく悲傷し玉ひ證寺證社をして祈らしめ給
ふと雖も更らに癒なし、天皇親阿の道譽高き
を聞召され疫病退散を祈らしめ給ふ。善阿勅
を奉じ一山の大衆を引具し宮中に參内、禁中
に秘寶の弘法大師利劍名號を懸け、大念珠を
操り一七晝夜不斷念佛壹百萬遍を誦す。日を
追ふて瘡勢頓に衰へ幾何もなく退散す。天
皇深く嘉稱し玉ひ百萬遍の勅紙及び此時修法
に用ひし利劍名號並に大念珠を下賜あらせら
れたのである。これより百萬遍念佛の修行こ

の本山の永式となつて今日に及ぶ。利職名號及び大念珠は本山重寶として現に秘藏せられて居る。又先代善導大師千二百五十年大遠忌の際謬誤されたと云ふ長サ六十間重サ八十貫と云ふ世界一の大本念珠が御影堂の中に懸け繞らされてある。

爾來知恩寺を又百萬遍と稱するに至り百萬遍念佛の根本道場となり是より以降天下厄災ある毎に祈願の勸を奉ぜずと云ふことなく數度繪旨を下し給ふ。其の一二を謄記すれば人皇第百壹代、後花園天皇文安五年、水災地震疫癘飢饉相次で起る。同六年四月大地震あり之れに因て御祈願の詔勅先例の如く下る、繪旨に曰く

當寺爲御祈願所須事淨土一宗之弘通一奉主新に朝家千載之榮運一者、天氣如此仍執達如件

文安六年五月二十一日 右中辨多房

知恩寺長老老大譽上人御房

第二十世澤蓮社善譽上人代

繪旨に曰く

知恩寺爲御祈願所一須致淨土一宗之興隆一事奉祈朝廷萬年之寶算一者、天氣如此仍執達如件

寛正二年七月十五日 左中辨 宜胤

善譽上人御房

同寛正四年將軍足利義政、公狀を贈つて曰く

知恩寺事爲祈願所一可致精誠之狀如件

寛正四年四月二十六日 華押

知恩寺長老善譽上人御房

又後花園天皇大譽に香衣を賜ひし繪旨には

當寺淨土一宗依爲第一善香衣二可令參内給者天氣如此仍執達如件

嘉吉三年正月十一日 右中辨 多房

知恩寺長老老大譽上人御房

これ等の繪旨、公狀に依りても知らるゝ通り

知恩寺は淨土一宗第一の寺であり、天下の御祈願所であつたのである。殊に「須らく淨土一宗の弘通を專らし」と宣旨せられ「朝家千載之榮運を祈り奉るべきもの」と仰せ出されたる、淨土の末徒能く心すべきことである。第九五世慶秀傳譽上人は、御柏原院

の勸を奉じて八幡正法寺より晉重せらるゝ（繪旨あり）後檀原院、殊に傳譽に御醫あり、龍饌を拜して直に紫衣を賜ひ、又、元祖大師の謬誤文、知恩寺の響、御殿寫の一枚起謬文並に之れに隨する女房の奉書等を賜ふ。

又傳譽存日、後檀原院は上人の靈像を讃され恐れ多くも宸筆を榮めさせらるゝ、其贊曰

南無阿彌陀佛

僧士假名人、淨土假名仁、影像與本質、共偏法界身

と、生前勸讃を得ること天下稀有の例にして

傳譽一人の榮譽と言ふべからず。

其他異代繪旨を拜して置重せる多、過分の恩遇を賜ひたるの文獻繁きに依りて今は略すとも、誠に厚け無き極みである。

これ等の繪旨公狀を讀みて拜見し、皇恩の山よりも高く、海よりも深きに感激止め難く殊に「須らく淨土云々」の御聖旨を奉獻し分に應じ職に従ひ、身力を盡して聖公の誠を致すべきを互に固く心に誓ひつゝ下山した次第であつた。



◇長期聖戰下に於て會員の皆様の御健勝と「淨土」の發展振りを喜

我が家の新體制

山崎 善一

「今日は月給日ですから、私が代理で勤めに行きます」



ばしく存じます。會員の一人として會員のますく増加することを心から祈念いたすもので御座ります。(熊本縣江田村 五野一之)

◇本部だよりで赤尾、大谷兩先生の東方書展入賞の記事を拜見いたし、鑑仰會の方で何とか御便宜を計つて御指導願ひましたらと存じまし

た。若し組織的なことが出来ませんでしたら、個人的にでも御縁をつけて戴けないかと思ひます。

(福岡市鳥飼本町、櫛野武雄)

◇月々の淨土誌にて入信の喜びを得させて頂きをります。殊に心經の中村先生の御親切な徴に入り細に亘る御講義は初心の私共も月々の一回の終

りに淨土門の難有き安心教説に、眞宗生れではあります。が難有く信仰修養上拜讀させていたたいです。仰れ小冊として發行に成ります。何れ小冊と、是非とも早く刊行していただきます。希望してゐます。(名古屋市昭和區、川口龍石)

行のみにては如何かと案じてゐます。(京都府久世郡御牧村、織田敏雄)

◇南支方面の前線にゐる主人から「淨土」といふ本を送つてくれるやうにとの手紙が参りましたので、今月號より送付願ひたく入會いたします。(山口縣小野田町、吉中靜枝)

◇會員御一同の健闘と「淨土」の發展を念願いたします。(鎌倉市長谷、佐藤密雄)

題簽 高楠順次郎博士
序文 平野 萬里氏
裝幀 山下新太郎畫伯

四六判二百五十頁
豪華版

岩野喜久代著

歌集

下町の灯

定價 三圓

發行所

大東出版社

芝區芝公園七號ノ一〇

木村氏に答へて (淨土宗讀本實踐篇に關し)

再び本尊の坐像に就いて

中村 辨 康

本誌「十月號」の坐像立像に就いての一文に對して、秋田の木村鈴信さんから、觀經の第七觀第八觀並びに善導大師の定善義の釋文等を論據として立像の來迎の御姿を以て正義と思つて居たのに、座像の方が本式で立像の方が異式であるやうに云はれて居るのは、信念對象の上に矛盾を感じるから、其の點に關して經證典據を擧げて座像の正式なるを説明せよ、との御手紙がありましたので、左に御答へ致します。

十月號の訂正文を如何に御讀みになりましたか存じませんが、何處にも立像異式で座像本式と云ふ意味のことを申して居ない事をよくよく御判讀願ひたいと存じます。あれは御斷りしてあるやうに、私も最初は衆生の救は

れる方面からも、また如來様が全他受用身として衆生へ働きかけて下さる御働きの上からも、立像の來迎身こそ最も正しいと信じて居たのであります。それ故にこそ「讀本」にさう書いたのでもあります。然る處主として樞尾博士から「宗義上からも座像立像共に許さるべきであつて、立像のみに限るものであるな。若し宗義上立像にのみ限るものであるならば、本座を始め諸寺並びに各家庭の佛壇に安置されてある本尊を悉く立像に統一せねばならぬ」との御注意があつたので、私も更に考へ直した譯であります。

それで大ざつばながら經典をあさつて見ると、阿彌陀經の「今現在說法」とか觀無量壽經の第八觀の「坐彼華上」や第十三觀の「丈

一寺院一支部の

確立のお願い

法然上人鑽仰會 は設立以來ここに

六周年を迎え、その間經誌發行、圖書出版、講演會開催等によつて微力ながら宗祖法然上人の御遺訓を普及し、お念佛による生活指導に努力して來ましたが宗祖上人の偉大なる御信念はいよく芳香を薫じ、漸次社會教化と淨土建設にその實を擧げつゝあるのは、全く會員諸賢の絶大なる御後援の賜物と感謝してゐます。しかし本會は時局のますます重大なるに鑑み、これまでの實績を第一段とし、新東亞建設のため信念を養ふ意味から、更に宗祖上人の崇高なる御人格、信念を宣揚し徹底せしめる第二段の活躍に邁進することゝなりました。

本宗々侶各位 には何卒本會の意あるところを御諒承下さいまして、本會とともに

六八尺」とか無量壽經の「五劫思惟」や「往昔無量阿僧祇劫供養及諸菩薩摩訶薩聞大眾聽受經法」や「恭敬繞三匝稽首無上尊」や「徧照十方國迴光聞繞身」や「無量壽佛爲諸聲聞菩薩大衆班宣法時都悉集會七寶講堂」などのやうに座し給ふお姿であらうと思はれる箇所も隨所と見られるのでした。隨つて座像も教義的に見て必ずしも肯定出来ない筈はないと思ひ直したのであります。然しながらかう二つとも可なりとした場合立像か坐像かの一方に決定した方が信仰上よいではないかとの意見もあり得ると考へましたが、それは宗乘學者の研究に待つべきものであつて、今の處立像坐像共に差支なしとするか、眞宗のやうに一方にきめてしまふかは私の如き一私人のよくすべき問題ではありませんから、立像坐像共に其人其人の境地や其寺其家の歴史に従ふべきであると思ひましたのです。随つてあの一交は「一方」づけず、立像にも坐像にも共に意義があるとしたのです。事實また本尊が人格である限り、一方づけることも無理ではな

いかと思ひます。

また木村さんは念佛の意地が「宗祖は歸命想引接想に依る」からと云ふ理由で立像を可とせられる議論を立てられましたが、決答疑問鏝に依れば「故上人は往生想は普觀めがましければ我が分に及び難し、源空は引接想に住するなりと仰せられき、辨阿は歸命想に住するなり（中略）先師の曰く故上人の云はく最後の時は見佛の想を成すべきなり」とあつて、其内確かに「往生想」は坐像が思はれますから、其點から云つて坐像よりも立像と云ひ得られますが、歸命想見佛想は立像のお姿にのみ限られて居るとは斷定が出来ないと思ひます。

此故に立像坐像共に意義ありとしてよいと思ひましたのであるやうに訂正したのもあります。

宗義の上から云つても一方付けてしまふことは困難だと思ひます。

今一度あの訂正文を御拜讀願ひたいと思ひます。

に手を携へ、目的完遂に突進すべく一臂の勞をたまはりたく存じます。これまでの本會發展の跡をみるのに、各支部の御臂折りに依るところが多く、中には數百の會員を擁する支部も幾つかあります。従つて今後とも

一寺院一支部を目標として支部の擴大強化に進まねばなりません、他方に於ては未だ支部の設立されてない本宗寺院も多くありますので、是非ともこの際支部を設立し宗義宣揚と齟齬たる時流を指導するために御協力下さんことを幾重にもお願いいたします。

尙支部設立について御不明の點がありまして何卒直接本部にお問合せ下さい。

(支部規約) 一、支部は會員五名以上を集めて組織して下さい。二、雜誌「淨土」の、配本方法には、本部から直接會員宛にお送りする方法と、支部長に括めて送り、支部長から各會員に頒けて頂く方法とがありますので、何れても御便宜の方を取計ひますから御通知下さい。(以下略)



信 仰 相 談

問

一、阿彌陀様は御誓願を

立願と法身の世界創造

日の子と改心

なされた時、何處へ御立願なさいましたのでせうか。此處がはつきり經文でどうなつて居るのでせうか。

二、上御一人様の御本體の御法身は神佛以上で此の世界大千世界を創造された御法體と思ひます。此の御法身が天皇様の御法心と思はねと、西方淨土の創造主がハツキリ致さぬ氣がしてなりませんが如何でせう。

三、宇宙には定まつた天道佛道の大法があつて、佛でも神でも御自身でまゝならぬ嚴法のあることと思ひますが、阿彌陀佛は

信 仰 相 談

(質問歡迎)

擔當 中村辨康

それを悲しんで無量永劫に考へ修行して乃至十念の悟りを覺り、自身も衆生も同一との大覺をなさつたのと思ひますが如何でせう。

四、私は法然様を日輪様のお御子様であると思つてから、心が三年このかた明かになり嬉しうぐめでありました。世界中廿億の人類や生物は一切皆な日輪様の御光被を頂いて生きて居るのであつて、この日輪様

の御徳は阿彌陀様のお慈悲とその儘だと思ひます。形に見せて頂くのは日輪様で、そのお働き四時逆行寒暑の御守護は、生物一切を生かす爲の休みなき御慈悲であり、私共はこの廣大無邊の懷に包まれて居るので、誠に勿體ないことと存じます。此の道理をくどく申しますと、人は氣狂ひ扱ひに致しますが、事實この私共の身體は色々のものから出来て居てもとは太陽の光のかたまりであります。日輪様は天道の法で無限り無い大千世界を創造された事と思ひます。ですから彌陀も釋尊も七高僧も皆な日輪様の御子であつて日輪様の御慈悲をお示し下さつたのではないでせうか。

五、此の心を改めずには、唯だ念佛のみとか、頼んで助けて頂くとか丈では、自ら安心はとても出来まいと思ひます。念佛の助業に行業を正しくして改悔しなければ三心



談相仰信

二、意味が明瞭でありませんが、佛教では創造主と云ふ者を認めません。若し創造主を認めるならば、創造主は何處に居たのでせうか、第一創造主の居場

の起る筈はないと思ひます。法然様の御教は完全に道徳も信仰も少しのすきもあらもない、實に佛神以上の大天道の権化のみ教へと思ひます。法然様の教を頂くと天道の御慈悲がハッキリわかります。行ひを正さなければ安心は頂けぬと、私は自分の體驗の上から申したのでありますが如何でせう。(名古屋・御器所、川口拜佛)

答

一、誓願を立てるのに、一體的に神佛にお誓ひをするしかたもありまして、自分自らに誓ふ場合もあります。阿彌陀様の誓願は第二の場合でありまして、何處へと云ふことはありません。御自身自らに誓はれたのです。随つて經文にはさう云ふことが隠はれて居ないのです。

所もありませんし、創造主自らは何うしてあつたのか、若し「著」とか「主」とか云ふものでなく「力」であるとするならば、その「力」は何うして出来たのですか。何うしてあつたのですか。何處にあつたのですか。此の事を解決しない限り理論が成り立たないと思ひます。

また法身と云ふのは「理」そのものであつて創造するとか創造しないと云ふ問題とは何の關係もないのです。例へば時計と云ふものは時計は時計を創造するとか創造しないと云ふ問題には關係してゐないのと同様です。時計の「理」は具體的な時計が識かに依つて此の世に初めて出来たとき、初めて時計の「理」が私達人間に明瞭になつたのであります。その「理」は時計が出来た時初めて出来たものではなく、もと／＼あつたのですけれども、時計が具體的に出来なかつた前には有るとか無いとか云ふことさへも明瞭ではなく、寧ろ「無い」と同様の姿で、宇宙の中に内在して居たのですが、時計が作り出されたとき初めて表面に現はれたのです。即ち時計の法身(理)は具體的な時計(報身)が出来た時ハッキリしたのです。そして一應時計(報身)が出来た以上、それからそれへと色々な時計(個々の時計即ち應身)が出来たのです。それと同じやうに法身は報身若しくは應身の中に相即してあるのであつて、法身が報身應身を創造したものではありません。見やうに依つてはもともと法身(理)があつたからこそ報身があり得たのだから、矢張り法身が報身應身を創造したのではないかと云はれないこともありますまいが、さう見るのは存在觀を基礎にした西洋流の見方であり、基督教的の見方であつて、東洋流特に佛教的な見方とは相違いたします。それでは時計の發明者の苦心慘澹は全然無駄であつて、忽然として出て來てもよい譯ですが、事實上ボカリと忽然と出て來た譯ではありません。色々な線の綜合に依つたもので、單一な原因で世の中の何物も出來たためしはないのであります。だから来る事實を無視した理論は成り立たないのです。



談相仰信

三、御考への通りで結構だと存じます。

四、太陽崇拜太陽信仰と云ふものは大體原始宗教の中、中期から

のもので、人間として太陽の恩恵に對して崇敬の念を持つのは當然ですが、太陽を以て宇宙の根元とする事は出来ません。大宇宙に於て太陽は一恒星に過ぎないのです。夜空に輝く無数の星は皆な夫れ／＼獨立した一個の太陽と埒しい恒星ですが、それも一つの天の川系統のものしか、秘達（ひだ）の目には見えないのです。此の天の川系以外にもつと多くの他の天の川系の如き恒星群があるかも知れないと天文學者は云つて居ります。一恒星でさへ幾つかの遊星を持つて居て、四季寒暑等は其の一恒星の引力に依る小遊星の運行から來るもので、大宇宙の廣大さから云へば、ホンの小さな運動に過ぎません。地球上の生物に取つては大恩恵であり、大運動であり、決してそれから外へ出ることは出来ませんが、大宇

宙から比較したら、全く小さなものなのです。随つて大宇宙の理を論ずるに當つては、太陽の力を根本原理とすることは出来ないのです。未開時代にはそれで通つたでせうが、少くとも現代では近視眼的な理論です。

無論秘達人間の事實から云へば此の地球上のもの即ち譬喩でも七高僧でも乃至は虫けらでも皆な日輪様のおかげであり子供であります。日輪様なしに生れ出ることも出来ず成長することも出来ないのです。だからあなたの仰しやることも言へるわけです。そして人として太陽の恩恵に感謝しつづけることは誠に結構なことです。

五、心を改めずに信仰には入られませんかとは仰せの通りです。つまり機を信ずることは心を改めたことです。「このやうな悪人」と云ふ自覺は心が改められたからこそ意識されたのです。

然し秘達は耳四郎と同じで、改心しながらも從來の古い習慣に引きづられ煩惱に引きづられて達ましい心や行ひを致し勝つもの

です。

十惡五逆の者も如來様の大慈悲は決して見捨て給はぬのはありますが、少しでも如來様の大慈悲に添ひ奉りたい心からよりよい行ひをしたい、正しい行ひをしたいと念願しながらも、ついくだらぬ事に心をなやましたり腹を立てたりして惡業煩惱を續けて居る淺ましい名なのです。全く「小罪をも犯さじ」とは念願しますが、中々簡戦には行きません。そこでいよいよ／＼如來様におすがりして「よりよい子供」にさせて頂くやう努める譯です。でも「行ひを正さなければ安心は頂けぬ」と云ふものではないと思ひます。

もう少しお考へになつて下さい。あなたは御老人でも相當に枯れ切つて居られるからよろしいが、若い人達にはさうは行きません。改め改めんと念願して居ても、遂また煩惱に引き廻されるのですから、餘りに嚴重にしては聖道門に墮ちてしまひませう。



引導とは何う云ふ意味か

問

お葬式おそうしきの時に「引導いんどう」と云ふものを致いたしますが、あれは何う云ふ意味いみのものでせうか。生きて居る時ときでさへ

分わらないのに、死しんだ人ひとに云いつてきかせて分わるものなのでせうか。そして大體だいたいに於おいて何う云いふことを云いはれるのでせうか。こんなことはお尋ねするののも變へんですが、差支さしつかへない範圍はんがいで、私達素人たちぞうじんの妄まがを開ひらいて下さ

いませんか。(東京・大森・H F 生)

答

大變だいへんむづかしいお質しつねです。大體だいたい淨土宗じゆつどしゆではチヤンとした作法さくぱがあり

まして、それを一人前ひとりまへの住職しゆしやくになり得る資格しやくかくのある人ひとに、行ぎやうをさせてから傳つたへますが、た

いまつの長ながさや長ながさの意味いみ及びその作相さくさうの意い味あじなどハツキリ極きよくまつて居ゐります。

然しかし今此欄いまこのらんでそれを

申まをし上げることは出来できません。大體だいたいに於おて、とその事ことよりも意持いぢが大切だいせつでありまして、傳つた法はふと云いふことも結局けつくりは意持いぢの決定けつてい確立かくりつを主眼しゆがんとする譯わけです。それで初めには五重自證門ごじゆうじじゆもんと云いつて信しんの確立かくりつを促うながしそれが出来できてから化他門けたもんとしての意持いぢを傳つたへるのが傳法でんぱうなので

す。

引導いんどうの文句ぶんくうにも一定いちていの作法さくぱがあります。宗旨しゆしに依よつて違ちがひますが、淨土宗じゆつどしゆでは三段さんだんに分わけて、第一序分だいいしゆぶんは佛教ぶつこくの第一義だいいぎを總體そうたい的に言いひ現あらわした經典きんべんの文句ぶんくうや列祖りやくその聖句せいくうを述べ、第二正宗分だいにしやうしんぶんでは善導大師ぜんどうだいしとか法然上人はふねんじやうじんとか鐵西上人てつしやうじんとかの祖師そし方はうの聖語せいごを以もつて淨土信仰じゆつどしんぎやうの大要だいやうを述べ、第三總結分だいつしゆめつぶんとして經文きやうもんや聖句せいくうの中ちゆうの重要な簡明かんめいな句くうで結びをつけます。そして最後さいごに十念じゆねんを稱なづへますが、淨土宗じゆつどしゆではむしろ此このの十念じゆねんに大きな意義いぎがあるとするもので、引導いんどうの文句ぶんくうはさほどでなくとも、最後さいごの十念じゆねん

の如何いかによつて正しく引導いんどうされたかどうかを決定けつていいたします。分わるか分わらないかの問題もんだいではなく、十念じゆねんが本當ほんたうに眞劍しんけんに如來にがはに南無なむされたか何うかが大切だいせつなのです。と云ふのは淨土宗じゆつどしゆでは一切いっけつは如來にがは様の御力ごりきを頼たのむのであつて、凡夫ぼんぷ自身の力ちからは認めないからです。唯ただだ至心ししんに念佛ねんぶつを通して如來にがは様さまにおん導ごんどうきをお願ねがひするので、引導いんどうの文句ぶんくうよりもむしろ最後さいごの十念じゆねんの眞劍しんけんな至誠しじやうが必要ひつやうなのです。ですから引導いんどうする人ひとの信念しんねん如何いかに重大じゆうだいな關心くわんしんを持もつてよい譯わけです。

淨き友の會 信仰坐談會案内

一、期日 十一月 拾日(第二日曜) 廿四日(第四日曜)

午後六時半より

一、會場 本郷區駒込東片町七八橋本方

(電話(85)四九七六)

一、選擇集議義 中村辨康先生

(來會歡迎)

淨き友の會幹事



覺醒の彼岸に往け

— 般若心經講義(第十講) —

中 村 辨 康

(一三) 眞實にして虚偽ならず

故知 般若波羅密多 是大神呪 是大明呪 是無
上呪 是無等々呪 能除一切苦 眞實不虛

故に知んぬ。般若波羅密多是是大神呪なり。是れ大
明呪なり。是れ無上呪なり。是れ無等々呪なり。能く
一切の苦を除く。眞實にして虚ならず。

般若波羅密多是菩提(即ち覺)を將來し、涅槃(即ち苦
惱の滅)を實證するものでありまして、謂はゞ佛教の精髄
精致とも云ふべきものですから、また「覺母」とも云はれ

て居るのですが、此の般若の「智」を表現するには、たと
へそれが眞般若から見れば、第二義的な、限定された意味
しか言ひ表はし得ないものであるとしても、私達人間の興
へられた範圍に於ては全く「虚偽なき眞實の把握」即ち「陀
羅尼」であると云はねばなりません。

「陀羅尼」と云ふのは梵語であつて、漢譯すると「總持」
と申します。總持とは「一切の眞實を持つ」と云ふ意味で
す。しかも元來「陀羅尼」には次のやうな四種があるので
すが、今は言葉を中心にして正しい眞實の意味を把握せし
めんとするので、特に「呪」と云ふ字が用ひられて居るの
であります。

法陀羅尼(人が正しく生くる眞理に就て)

義陀羅尼（眞理の意味を正しく理解することに就て）

呪陀羅尼（眞理を文字又は言葉に表現することに就て）

忍陀羅尼（眞理を正しく體認することに就て）

即ち今は言葉借りて眞理の根元を説くものですから

「呪」と云ふ言葉を以てし、それを

大神呪、（人智のよく預り知らぬところである）

大明呪、（一切の闇黒を照破するものである）

無上呪、（此上もなき道を得るものである）

無等々呪、（他に比適すべきものなし）

と四通りに賞め立てた譯であります。

それは此の「般若」の智に依りますと、私の身も心も

（即ち五蘊）また之の一切の事々物々は私達の思つて居る

やうな固定存在ではなく、皆な悉く諸縁の和合離散に依て

刻々に進展推移變化しつゝあるもので、我と固執すべきな

く我がものとして所有すべきものを諦認しますか

ら、所有觀念や「我」の觀念から来る色々の葛藤矛盾に悩

まされることなく、随つて一切の苦は苦とするに足らず、

本質的な「苦」でないとして「苦」から超脱することが出

来ますし、眞實の生活へ一步一步と進み得られ、遂に涅槃の眞生、菩提の覺路に達し得られるから、無上道を體得す

るところの「無上呪」であり、一切の苦惱暗黒を照破し消滅するところの「大明呪」であり、凡庸の人智を以てしては計り知ることの出来ない「大神呪」であります。だから一般

若の智こそは他にくらぶべきものなく匹敵すべきものも

ない「無等々呪」である譯であります。

それは決して虚偽ではありません。眞實そのものであり

ます。

即ち「自我」のあやまれる見解を破つて本當の「無我」

にめざめつゝ、生活の上に常に「無我」を行つて行ける指

導原理なのであります。

誠に此の身は父祖の現はれであります。イヤ正しくは天

地の御恩の現はれであります。天地一切のおかげの凝り集

つたものであります。社會の一切の力の集つた結晶であり

ます。随つて私達日本人は此の意味に於て天子様の御恩

の集りであり國家の御恵みの集りでありますから、此の心

が國家進展の爲に正しく生き、此の身が國力發展の爲に正

しく生き、此の身が國力發展の爲に正しく使用される時、

初めて般若の智が具體的に私の上に顯現し得たのであり

ます。

然るに私達の日常の事實は色々手前勝手をしたり我慾

を

をつのらせたりしてゐるのです。之れは國力の進展を喰ひ止めて居る「死」の姿に外なりません。

此の「死」から「死」へと移つて居る現實の生活を反省し、以て生々化育を要求して行く「生」の世界を押し立て押し進めて行かねば本當とは云はれません。さうなつてこそ眞實の世界であり眞實不虛の生活であります。

それには何うしても現在の迷へる生活から覺醒の彼岸に渡らねばなりません。それを勸説するものが次の「十八字」の呪文だつたのであります。

(一四) 人々よ覺醒せよ

故説般若波羅密多呪 卽説呪曰

揭諦 揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提薩婆訶

故に般若波羅密多の呪を説かん。卽ち呪を説いて曰く

揭諦 揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提 薩婆訶

世の中には咒文と以ふものに何かしら不思議な靈力ありとする人がかなり多いやうですが、それは皆な荒唐無稽な迷信からさう思はせられて居るのです。無論さう思ひ込ん

だところに精神力が普通以上に働きますから、精神界の事實にうとい人々は宛かも呪文そのものに靈力があるかのやうに思はれてツイ眩惑され勝つものですが、呪文そのものには決して力はないのです。呪文はその意味を完全に理解しそれを生活に顯すところにその正しい本當の價値があるのです。然らば何故に陳腐漢語の何が何だか判らないやうな文句を採用して居るかと云ふに、それは翻譯したのでは完全に意味を現はすことが出来ないからでありまして、漢譯せずに原語のまゝにしたのであります。

尤も昔から原語のまゝにして置くのには五種の理由からだと申して居ります。卽ち

一、秘密の故に（顯はにしては尊厳しないから）

二、多義を含むが故に（意味が複雑で云ひ現はすに困難だから）

三、此の地に無き故に（氣候風土の關係から全然無いものであるから）

四、古風を存する爲に（文章に滋味をつける爲めに）

五、利多きが故に（利益が多いから）

と云ふのですけれども、第五の理由の如きは功利的な意味が澤山ありますが、それと第一の理由の「知らしむべから

す依らしむべし」とする秘密主義とくつついて現在のやうな迷信的なものに墮落してしまつたのです。だから第二第三第四の理由が最も妥當な理由だと思ひます。

偕て今ま此の心經の十八字呪を翻譯しますと、「揭諦は「往く」とか「去る」とか云ふ意味であり「波羅」は「波羅密多」の「波羅」で「向ふ岸」即ち「彼岸」の意味であり「僧」は「合ふ」「一處になる」と云ふ意味であり「菩提」は「覺」であり「薩婆訶」は「その通り」と云ふ意味の字で「眞實なり」とか「成就」とかに義譯して居ます。

だから之れを和文に直すと
往け。往け。彼の岸に往け。彼の岸に往きつけば「覺」がある。それは本當のことだ。
と云ふことになります。

古來漢譯して

度々、彼岸度、達彼岸、覺成就、
と云つて居ります。

そして「揭諦」には「去」又は「度」の意味があり「去」は「一切の迷ひを去る」と「度」は「生死の此岸から涅槃の彼岸に渡る」ことであるがそれを二度重ねたのは「自度」と「他度」即ち「自利」と「利他」とを意味して居る

のだと云つて居ります。

して見ればこの十八字の呪文は涅槃の世界、菩薩の世界に往かんことをすゝめて居るものであることが諒解されませう。

涅槃の世界、菩薩の世界は佛の世界であり淨土のことでもあります。だから淨土に往くこと、それが此の心經の眼目であつた譯で、今までに色々といふでもないかうでもない「無い無いづくし」の否定で來たことも、最後の此の十八字の呪文に依つて肯定の道が開かれ、私達への積極的行動を促がして居るものと思ひます。かの大般若經六百卷は最後の「常啼菩薩求道譚」に至つて初めて、今までの長い長い消極的態度を一邊に積極的なものに轉換させて居りますが、それと同じやうに此の心經も最後の呪に依つて全く畫龍點睛されたものであります。

即ち心經二百六十二字は専ら般若の空理を説いたものには相違ありませんけれども、單にそれが理の上にのみ止まつて居るのであれば、鬼もすれば「單空」に落ちこみ消極的な虛無主義になつてしまはぬとも限りません。然るに般若が本當に求めて居るものはさうしたところにあるのでな

「眞空を知つてよく妙有に住す」

るところにあるのであり、積極生活の自在活用と、進んで止まぬ勇氣とを得んとするのでありますから、二百六十二字は約まつてこの十八字の呪にあり、更に十八字の呪は「彼岸」に往くの一句に究極される譯であります、外の言葉で言へば「往生淨土」の四字こそが此の心經の最後の目的であることを知ることが、眞に心經そのものの眞髓を探り得たと云ふべきであります。

無論理の上からは此の心經の目的は「迷ひを轉じて悟りを開く」ところにあるとも云へませう。また道德的には「惡を廢して善に進む」ところにあるとも云へませう。更に感情的には離苦得樂の「淨土への往生を求む」ものであるとも云へませう。それぞれの見方に依つて或は聖道門の教理ともなり或は淨土門の實踐法ともなるのではないかと思ひます。併しながら深邃な哲理や森嚴な戒律は、いまだ普門の宗教とはなり得ません。

宗教の眞の價値は普門普益にあると思ひます。如何に高貴な藥でも容易に手にはいらないやうな高價なものでは一切を救ふことは出来ません。併し米の飯では凡てが救はれて行きます。如何なる高等の滋養食も遂には平常の米飯に

立ちかへつて初めて落ちつけるものです。

だから結局は淨土の法門に來て初めて萬人共に救はれる道があるのだと思ひます。觀音菩薩は阿彌陀の慈悲を分擔して居られると云はれますが、その慈悲施無畏の觀音菩薩が、單に般若の智の方面のみを説いて、他の慈悲の一面を説かぬ筈はありません。此の心經が理智の上に立つ勢至菩薩や文殊菩薩を表面にしないで、ことさらに慈悲の觀音菩薩を持つて來たところに深甚な意味が存することを知るべきであります。さればこそ最後に至つて十八字の呪を示めし、其の呪が「到達彼岸」言ひ換へれば「往生淨土」をすゝめて居ることを深く深く心に銘記すべきではありますまいか。

由來觀音信仰は彌陀信仰の先驅をなすものです。ビルマにシヤムに安南に支那に日本に其の他どの地に於ても初め彌陀信仰があつて續いて觀音信仰が來ますが、その次ぎには必ず彌陀信仰が行はれて居ります。これは判を捺したやうに何處も同じ經路を踏んで居るのです。なぜでせうか。即ち人の心は初めは現實的であつてもだん／＼理想を求めからです。まだ菩薩と云ふ手近さからはいつても、やはり完全なものを求めずには居れない人間の探究心が、さう

させて居るのです。無論此の心經では「阿彌陀」と出しては居りません。私達の持つて居る

一、自我身見（五蘊を以て自我と執し）

二、苦樂邊見（苦樂にさまよひ歩き）

三、顛倒邪見（よこしまなる考のみを抱く）

妄見謬見を打破することに急であつて、まだ中々無量壽無量光の中に安住せしむると云ふところまでは導かれ得る餘裕をもつて居ないので。よしかりに無量壽無量光を説いても有所得心を以て居る限り、本當に無量壽無量光を理解し得ないかも知れません。だから取りあへず慈悲の觀音を出し「到達彼岸」を奨むるだけに止めた譯でもありません。

傳説に依れば此の心經が説かれた時

普賢菩薩は頤を解いて喜び

文殊菩薩は破顔微笑し

彌勒菩薩は手を叩いて喝采した

と云はれて居ります。

即ち普賢菩薩は願行を中心とする實踐的な人だからです。また文殊菩薩は深智を以て觀音の眞意を洞察されたに相違ありません。また彌勒菩薩は釋尊の次ぎの佛たることを約束されて居る人ですから、その喜びは利生と云ふ宗教

的意味に於て一層深いものがあつたであらう。

文字の數は二百六十字あまりしかありませんが、其の内容は佛教の殆んど代表的な教理を盛り入れて、しかも信仰的實踐宗教をも内蔵して居る此の心經です。されば殆んど各宗に於て此の心經を採用して居るのも合點が行きます。

弘法大師は此の心經を讚嘆して「心經秘鍵」に、

眞言は不思議なり。觀誦すれば無明を除き、一字に千里を含み、即身に法如を證す。行々として圓寂に至り、去々として原初に入る。三界は客者の如し、一心は是れ本居なり云々

と云はれました。深く味へば實に妙味浸々として汲めども盡きないものがあるでせう。

しかもまだ深く淨土教の意味に吟味した人はいやうです。元よりそれは殆んど其の必要をも認めなかつたからでもあります。私の如きは元より淺學淺信であつて、本當にさうした意味に此の心經を味ふことが出来ませんけれども、つとめてさうした觀點から見やうと試みました。それは極めて淺薄なものでありましたが、唯だ將來への何分かの示唆ともなり得れば幸ひ此の上もないと思つて居ります。（終）

編輯後記

◇會員倍加運動と銘打つて會の擴大をお願いして以來、各方面の御厚情によつて目に見えて効果が擧つて來ました。幾重にも御禮申しあげます。

◇又色々な御忠告をいただき誌上からもお禮を申し上げます。なるべく各位の御希望に副ふべく努力いたしてゐますから今後とも何か御指導を願ひます。

◇本會の新たな諸計畫はすでに實踐第一歩を踏み出し、懇談會、坐談會、誌友會等やつき早やに催しました。その詳細なことは何れ誌上から御報告いたします。

◇吉田絃二郎先生から微恙と御多忙中を玉稿をいただきました。此頃、時たま床につかれることは心配する程はないまでも、先生の

御自愛を祈ります。

◇佐藤泰夫先生は相變らずの御元氣ですが「研究しながら少しづつ續けて行きませう」とのことです、少しづつ漸次築かれてゆく極樂の姿を楽しみにしてゐます。

◇日野西德實尼の「六波羅密の語」は過日ラヂオで全國に放送されたお話を増補改訂して寄せて下されたものです。

◇渡邊得男氏の「靜寛院宮さまを想ふ」は十月二日宮内省御下附の御佛間を東京芝増上寺に移築完了した記念日に草されたお話です。

◇村田嘉久子さんから「百萬遍」をいただきました。しみりとした懐しさを憶える佳篇です。

◇「大本山知恩寺に詣で」は寺院巡り第一回で、今後當分誌上で著名寺院を紹介いたします。

◇近く「川柳境」を新設して各方面の御希望に副ふことゝいたしました。

ます、依つてこれが準備を急いでありますが、會員各位もふるつて御投稿下され、會員の川柳境として育てていただきますものです。

◇歌壇、俳壇と同じやうに川柳境の原稿メ切は前々月末日までとなりましてから御承知おき下さい。つまり十二月の原稿メ切は十月末日までとなります。

◇支部長各位には何かと御骨折りを戴いてゐますが、尙富方からの問合せに對して成べく速く御返事下さるやうお願いいたします。

◇御註文の場合は種彙、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいませう。尙送料をお忘れなき様お願いいたします。

◇お手乍ら代金引替は一切お断り申上ります。

◇會員で御住所御變更の方は現御住所と共に前住所をも御明記の上御通知下さい。

◇廣告掲載については直接本會庶務部にお問合せ下さい。

淨土 十一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年十月三日印刷納本
昭和十年十一月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園五號地一〇
編輯兼 眞野 正 順
發行人

東京市芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 (六日印刷株式會社)

發行所 法然上人讃仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

● (送料五厘)

會費 金一圓二十錢

一ヶ年 (送料不要)

法然上人鑽仰會刊行圖書

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村辨康著

(四六版一三〇頁總ルビ付)

法然上人の信仰生活

定價三十錢
送料六錢

中村辨康著

(四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價二十錢
送料三錢

藤井實應編

(增刷出來)

菊半截一四四頁
總ルビ付

法然上人法語抄

定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫著

特製ノート型、天金
十二ポ總ルビ、三〇〇頁

法然上人
別傳 掬水譚

定價四圓五十錢
送料二十二錢

中村辨康著

(四六版七〇頁總ルビ付)

講話一枚起請文

定價十錢
送料三錢
(品切)

大野法道著

(四六版六〇頁總ルビ付)

法然上人

定價十五錢
送料三錢
(品切)

中里介山著

(三六版二五〇頁クロス装)

法然上人傳

定價六十錢
送料六錢

佐藤春夫・吉田絃二郎・岡本かの子
倉田百三・郁芳隨圖著 (增刷出來)

(四六版總ルビ付)

我が信仰

定價六錢
送料三錢

法然上人鑽仰會編

(菊版一一〇頁總ルビ付)

念佛讀本

定價二十錢
送料六錢

大正大學 教授 大野法道

前淨土宗 教學部長 中村辨康

關西大學 教授 前田聽瑞三師共著

淨土宗讀本

しつかりした信仰へ！ 本書の示す道をたどつて！

いままでにこれ程長く纏つた佛教讀本はどこからも出たことがありません。だから、本書が一度現はれるや絶対的な好評をまき起したのは當然です。むづかしい原典によらうとも、これだけで淨土信仰に必要なものがすつかり解ります。行文もまた流麗、わかり易く説かれてあります。

絶対的好評・三版出來！

滿洲・支那・米國はおろか、前線からも注文が殺到しております。そして讀んだ人がすべて惜しみなく讃辭をよせられてゐます。

菊判四五〇頁・總クロース装
本文五號、寫眞、挿繪、二圖、五十錢
送料 二一十一錢
(朝鮮・臺灣・滿洲等 四九錢)

★本書發行の書籍は可成直
接本會へ御申込下さい。

★代金引かへの申込みは一
切お断りしております。

★應償てお断りしてゐるの
です。送料をお忘れな
く。

法然上人
鑽仰會

東京市芝區芝公園十五號
振替東京八二一八七

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十五年十月廿日印刷納本 昭和十五年十一月一日發行

淨土 第六卷 第十一號

（傳）

定價 金十二錢（送料）
滿洲等 金十三錢
外地定價 金十三錢